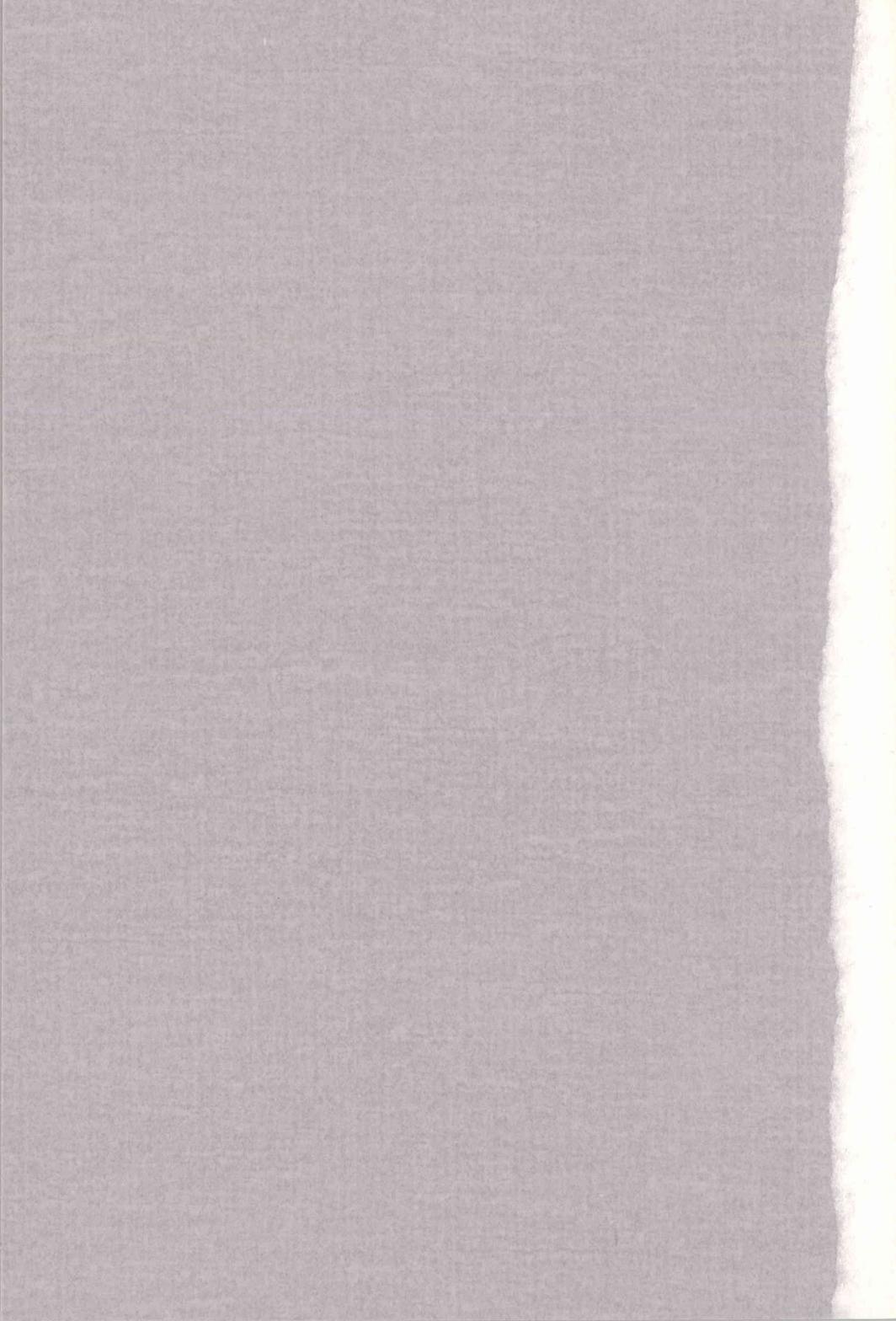


日本福音ルーテル教会 百年史論集 第2号

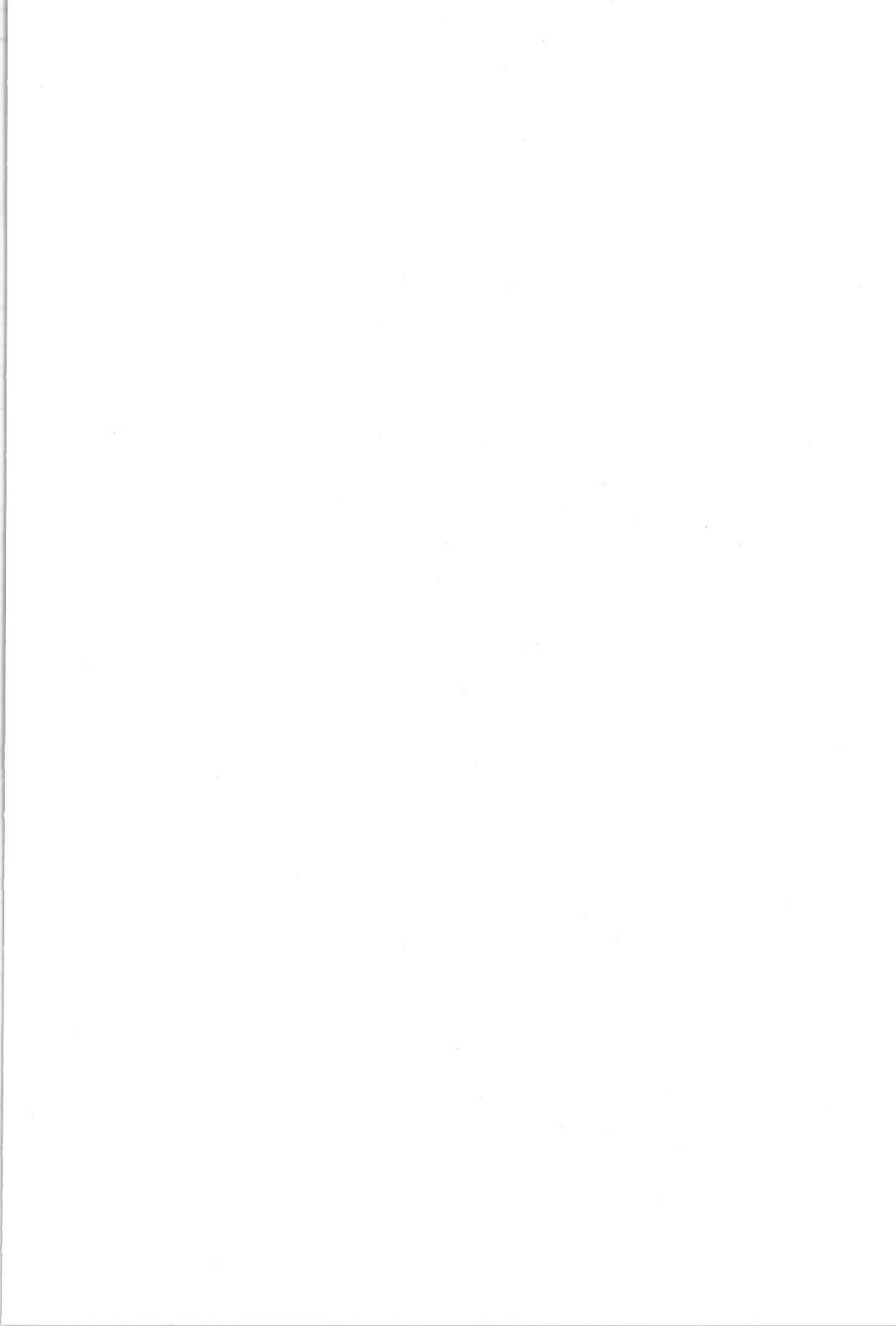
アメリカ・ルーテル教会の世界伝道(その1)・D. ヴィクナー
山内量平評伝(その1)・坂井信生
座談会「教会建築の歴史と現代」(その1)
《エッセイ》初めに言があった・西 恵三
書評『博多ルーテル教会八〇年史』・白川 清
日本のルーテル教会の歴史叙述・徳善義和

百年史委員会



日本福音ルーテル教会

百年史論集 第二号



目次

アメリカ・ルーテル教会 (LCA) の世界伝道 (その一)	D・ヴィクナー	五
山内量平評伝 (その一)	坂井信生	三一
座談会「教会建築の歴史と現代」(その一)	五五
《エッセイ》初めに言があった	西 恵三	六七
書評『博多ルーテル教会八〇年史』	白川 清	七三
日本のルーテル教会の歴史叙述	徳善義和	七九
あとがき	徳善義和	九一

アメリカ・ルーテル教会(LCA)の世界伝道

一八四二年—一九八二年(その一)

デイヴィッド・L・ヴィクナー

序 伝道開始

クリスチャンの伝道活動は、祈りつつ待望していたイエス・キリストに従う会衆に、神が聖霊を送ったペンテコステの時に始まった。その日、ペテロの説教と悔い改めの呼びかけに従って、ローマ帝国各地から来た三〇〇〇人の献身的な人々が洗礼を受け、同じ聖霊を受けたのである。使徒行伝には、キリスト教がエルサレムからユダヤへ、そしてサマリヤと全世界へと広がっていったことと、その後の逸話とが記録されている。三〇〇年のうちに、キリスト教はローマ帝国の公認宗教となった。それに続く何世紀かの間に、キリスト教信仰はヨーロッパに広まり、征服と植民地化、そして移民によってアメリカに進出した。一九世紀以前にも、アジアやアフリカに、結果こそ違え、キリスト教は到達していた。中国と日本の双方では根づいて、短期間繁栄したが、地域の反動に直面して消滅した。また、かつて栄えた北アフリカと中近東のクリスチャン共同体は、たび重なるイスラム教の進攻の前に、防衛的な残存物に低落してしまった。

アメリカのルーテル教会の起源は、信仰を抱いて中部と北部ヨーロッパから北米に渡つて定住し、そこで民族的な礼拝共同体として集約されていった、うねるような移民の波に求めることができる。ヘンリー・メルクワール・ミュレンベルグはインドで宣教師として働く訓練を受けたが、インドに行く代わりに彼は北米植民地に來ることとなり、ドイツ移民をルーテル教会会衆として統合したり、L C Aの構造的な出発点ともなった規模の大きい管轄区域を形成していくのに、指導的な働きを演じた。後にはスウェーデン、デンマーク、フィンランドからの移民教会も、類似した経過をたどつて伸展していった。

一九世紀初頭にはすでに、L C Aの前身にあたる諸教会は、アジアやアフリカにおける宣教活動をヨーロッパの宣教団体を通して支えていたが、一八四二年に初めてL C Aの宣教師が任を受け、海外に派遣された。ジョン・クリスチャン・フレデリック・ヘイヤール師はその年にペンシルヴァニアを離れ、インドのグントウールで働きを始めた。その働きは繁栄を続けている。

ケネス・スコット・ラトウレットは、『キリスト教拡大の歴史』という彼の全七巻の著作のうち三巻を、「偉大な世紀」と彼が呼ぶ期間のために捧げているが、それは一八一五年のウィーン条約から一九一四年の第一次世界大戦に至るものである。北大西洋における欧米の領土拡張主義のこうした時代に、欧米の宗教はほとんど余すところなく全世界に持ち込まれることとなったが、最悪の場合には、キリスト教と欧米の植民地主義は領土獲得の協力者であった。また最善の場合をみると、比較的平和であった一世紀の間に、宣教師の働きは全世界の人々にイエス・キリストの自由の福音を伝え、植民地時代に端を発する精神的かつ社会的な大変革を起し、植民地以後の独立国家の時代にも繁栄を続けることができた。

一、北米外における LCA の伝道関与の歴史

第一期——宣教師時代、一八四二年—一九四二年

現在、北米外における LCA の伝道関与は、第三段階を迎えている。第一段階は宣教師の時代である。LCA にとってその始まりは一八四二年であり、第二次世界大戦と共に、約一〇〇年後に終わった。この期間は五つの主な特徴によつて表わされる。

五つの主な特徴

第一の特徴は、LCA の前身団体は、北米やヨーロッパの他のクリスチャンたちと並行して、アフリカやアジア、そして南米に宣教師の人員を継続的に派遣したことである。それは、キリスト教下の欧米の人々が言葉と行為を通じて、総ての人類のためにイエス・キリストがこの世に来てくださったというよい報せを、非欧米の世界に伝えるという、一方通行であった。時代の子として、これらの宣教師たちは、「白人のための重荷を負う」という役割を引き受けていた。彼らは植民地の権力者と協同し、時には彼らの庇護を受けた。それと同時に、ごく初期の段階に、宣教師たちは彼らが仕えていた人々に同化し、人々の利益を代表し、キリスト教と欧米の世界の安直な同一視に疑問を抱き、彼らが置かれている状況を理解しようと努め、彼らをとりにくく人々の高まりゆく熱望に共感を持っていた。これら第一期の宣教師たちの大部分は、北米の小さな町や農村の出身であった。彼らの多くは移民の子供であつて、ほとんどアメリカ化されていなかったが、伝道の召しには従順であつた。

第二に、母国の関心あるクリスチャンのグループが、伝道協会を形成したことである。彼らの基本的な任務は世界

伝道への関心を鼓舞することであり、しばしばそれは特定の地域を対象とし、宣教師を選び、海外に派遣し、そして彼らを祈りと財政的手段をもって支えた。

たとえば、一九〇一年にミネアポリスのベツレヘム教会の牧師館で、一一名の牧師と信徒が伝道報告を聞きに集まった時に、LCAの中国伝道が発足したのである。中国伝道協会は一九〇二年に設立され、一九〇五年には最初の宣教師が中国に到着した。何年か後に、オーガスタナ・ルーテル教会の外国伝道局を組織するために、それは類似した他の団体と合同した。

第一期に始まったいくつかの最も重要な伝道団体のなかに、婦人伝道協会がある。一八九七年に、オハイオ州でジエネラル・シノツドの婦人国海外伝道協会という会が生まれた。一八九二年に、オーガスタナ・シノツドの婦人たちが、同様の機関を形成している。LCAの前身団体の中に生じたこれら二つの伝道協会と類似機関は、祈りと人員、財源、通訳、そして指導などにおいて世界伝道事業を支援した。

海外で、宣教師たちは、第一期を通して働きを指揮する伝道組織を形成した。選出された宣教師の指導層のもとで、地域伝道の総ての計画が遂行された。この計画には、しばしば福音伝道や教会形成、社会事業、医療奉仕、そして現地の教会奉仕者を育成するための神学校、聖書学校、小中学校などの教育事業等が含まれていた。これら総ての活動は、熟練した献身的な宣教師たちによって運営されていたのである。

第三に、種々の経路を通し、委員会において同意が達成され、活動の初期にあった欧米の海外伝道諸団体の伝道地として、細心の注意を払って働きの地域が選定された。このことの実施における二重の目的は、福音宣教と人々の必要のための奉仕によって総ての未伝道地域を覆いつくすことと、欧米教会の奉仕を受ける側の心に混乱を招かないようにすることであった。これは、プロテスタント教会間における、エキュメニカルな協同作業の初期の形であった。植民地が確立された所では、伝道機関はしばしば植民地権力の傘下にあった。ルーテル教会はタンザニア、聖公会は

ケニア、そしてオランダ改革派がインドネシアで強力であるのは、けっして偶然のことではない。中国の湖南地方では、オーガスタナ・ルーテル教会の伝道地は、カナダ聖公会に北を囲まれ、アメリカ南部バプテスト教会が東、ノルウェーのルーテル諸教会が南、そして中国内地伝道会が西に位置していたのである。一般的には海外伝道機関が責任を負っていて、人々が地理的に安定して滞在している限りにおいては、委員会での同意事項は固く守られていたと言えよう。

第四に、総てのプロテスタントの宣教師の間には、高度の神学的均一性があった。彼らは、偉大な宣教命令への従順さ、霊的かつ物的な救いを世界が絶対に必要なという理解、そしてその救いを実現するイエス・キリストの福音の独自性への信頼という点において結ばれていた。彼らは、送り出している母国の教会ほどには、多様な教派間の神学的な相違について、気にとめることはなかった。彼らが奉仕し伝道への献身によつて勢力を得ていた分野における、圧倒的な非キリスト教要因を彼らは敏感に察知し、初期のLCA宣教師たちはルーテル教会員であるよりはむしろクリスチャンであった。同様の視点が総ての主要プロテスタント教派に所与のものとされるならば、一九一〇年のエジンバラ宣教会議が、三八年後の一九四八年には世界教会会議の形成を導く重要な会議となつたことに示されるように、なぜ現代エキュメニカル運動が宣教師たちのあいだで始まつたのかを理解することができる。

第五に、当初から近代伝道活動は全人格的なものであった。宣教師たちは人々の全体的な必要を察知し、説教し、癒し、そして教えた。諸伝道機関は、アジアとアフリカの広範囲な地域での、近代教育と医学の初まりを担つてきた。小学校から大学に至るミッション・スクールは、多くの人々の心を、欧米世界の最善と最悪のものに開眼させ、彼らが欧米の領土拡張主義の屈強な力に対決させられた時に、彼ら自身の伝統を評価し理解するための最初の技術を提供した。サハラ以南のアフリカで、植民地以後の独立国の指導者となつた人々のほとんどが、ミッション・スクールの出身者であつたのは、けっして偶然ではない。アジアでさえも、第二次世界大戦以前と以後の国家的指導者の圧倒的

なパーセントが、彼らの人生のどこかにおいて、キリスト教教育機関で訓練されているのである。

一九世紀から二〇世紀初頭には、広範囲に及ぶ病院や薬局網を通して、医療業務を担当する宣教師たちがアジアやアフリカに西洋医学の恩恵をもたらした。また、社会福祉の計画や障害者の施設なども、その時に発展したのである。これら総ての中の主要な部分として、福音が宣べ伝えられ、教会が形成された。欧米の牧師や教師、そして医療担当者はすべて宣教師であり、教会や学校、病院や社会福祉センターなどは教会の伝道の一環とみなされていた。

LC Aの関与範囲

一九六二年にLC Aとして合同した前身団体は、第一期において七カ国で海外伝道を始めたが、それらは一八四二年にインド、一八六〇年にリベリア、一八九二年に日本、一九〇五年に中国、一九〇八年にアルゼンチン、一九一三年にギアナ、そして一九一八年にタンザニアであった。American Evangelical Lutheran Church は、インドで Northern Evangelical Lutheran Church (NELC) の発展を助成した単立スカンジナビア伝道会であるサンタル・ミッシェンに積極的に関与していた。一九五一年には、後にマレーシアと呼ばれるようになったマラヤで、北米一致ルーテル教会 (ULCA) が第一期のタイプの伝道を始めた。

伝道、教育、医療、そして社会福祉の活動などの範囲は、国家間によってかなり異なっていたが、すべての地域で人々は福音に呼応し、個々の教会が形成され、教会が組織された。オーガスタナ・ルーテル教会や北米一致ルーテル教会 (ULCA) と、関連するシノッドを含む中国ルーテル教会 (LCC) は、一九二〇年に設立された。言わば LCC の子孫にあたるどころの香港福音ルーテル教会 (ELCHK) と台湾信義会 (TLC) の双方は、一九五四年に組織された。インドでは、五つのシノッドからなる Andhra Evangelical Lutheran Church (AELC) が一九二七年に発足した。ULCA、そしてフィンランド・ルーテル福音協会 (LEAF) と友好関係にあった日本福音ルーテ

ル教会 (JELC) は、一九三〇年に設立された。オーガスタナ・ルーテル教会とスオミ・シノッドの宣教師たちは、一九五〇年に日本に赴任し、JELCと協同関係を確立した。

Evangelical Lutheran Church in British Guiana は一九四三年に形成され、一九六六年には Lutheran Church in Guyana (LCCG) として再編成された。Evangelical Lutheran Church in Liberia は一九四七年に発足し、一九六五年に Lutheran Church in Liberia (LCL) として再設立された。アルゼンチンではミッシェン教会が現地で作られた教会と合同し、一九四八年に United Evangelical Lutheran Church (UELCC) を形成した。オーガスタナ・ルーテル教会と関連のあった中部タンザニアのルーテル教会を含む七つの独立したルーテル教会が合同し、一九六三年に Evangelical Lutheran Church in Tanzania (ELCT) が生まれた。ULCAの宣教師たちがマレーシアで仕事を始めた一〇年後の一九六三年には Lutheran Church in Malaysia and Singapore (LCMS) が設立されたのである。

第一期におけるLCAの総ての伝道活動の重要な成果の中で特筆すべきは、これら自立し土着した九つの教会の存在である。アルファベット順に列举するならば、AELC、ELCHK、ELCT、JELC、LCG、LCL、LCMS、TLC、そしてUELCCである。

第一期の評価

第一期の評価は二つの段階を経て、第三番目のそれに入っている。最初の場合には、世俗社会の多くは伝道事業を無視したが、諸国にキリスト教の恩恵がもたらされたことを喜びつつ、教会自体は意気揚々と前進した。キリストのために総ての障害に勇敢に立ち向かった宣教師たちは、教会の英雄として称賛された。

世界の変遷と時代の推移とともに、異なった評価が主流となった。世俗社会は相変わらず伝道活動を無視し、教会

は総ての努力の結果をはるかに批判的に見るようになった。まず、世界のクリスチャンは、宣教師が奉仕した地域で豊かな伝統を背景にしている教会によって下された浅薄な理解と、欧米文化とクリスト教との安直な同一化に、そしてクリスト教とその生活様式の独自性への無反省な自信に疑問を抱いたのである。若い教会の構成員も、解放され発言権を得るに従って初期宣教師たちへの批判に加わり、彼らが欧米の政治、経済、そして教會的支配を永存させ、自分たちの古来の文化を破壊することに加担したと、非難した。

さらに時が経過して、伝道の期間についての評価は第三の局面に入った。「若い教会のサディズムと古い教会のマゾヒズムが早く終わる日が来て欲しい」と、最近の会議で若い教職者が年輩の教会関係者に語っていた。世俗社会とクリスチャン社会の両方が、時の経過と科学的研究能力によつてもたらされるいつそう客観的な立場から、一九世紀の伝道活動を再評価しつつある。評価者がどのような立場に立とうとも、身体の癒しや、精神の鼓舞、被抑圧者の解放、そして地上の人口の四分の一を占める世界的規模のクリスチャン社会に働く聖霊の感化のもとでの創造活動などに関与する運動を、この世は放逐することはできないのである。

第二期——「若い教会」の時代、一九四三年—一九六八年

第二期のLCAの海外伝道への取り組みは、一九四三年から一九六八年に至る二五年間の期間に及んでいる。それは外部的かつ内部的要請のもとで第二次世界大戦の時に始まり、一九六八年のLCA世界伝道局の断固たる決議によつて終わったのである。

政治、経済の発展

第一次世界大戦は、一時代の終結の徴候を示したが、本当の最後は、第二次世界大戦中と、その直後までは認めら

れなかった。欧米の植民地主義は終わり、世界中に新興国家が誕生した。国連が設立され、NATO、ワルシャワ条約機構、非同盟国などの新しい同盟関係が生まれた。新興国家があれこれの政治体制を選択し、旧国家群がイデオロギーを移行させるとともに、資本主義と社会主義の葛藤は尖鋭化した。新興国家が一堂独裁体制のもとに、人為的な国境線内でアイデンティティを求めて闘争する時、独立の陶醉感はず急に薄らいでいった。国際的な植民地的経済網は、超国家的商取引企業に置き換えられ、自分たちのためだけに責任を負う国際エリート集団がその中で働くことになった。

伝道発展の三主要点

こうした新しく変化していく状況の中で、LCAの海外での取り組みは三主要分野での発展として特徴づけることができる。それらは、アフリカ、アジア、南米などのLCA関連教会との関係、世界の他の地域の教会にまで拡大された関係、そして種々の教会間の、また、国際諸機関との関係におけるものである。

九つのLCA関連教会との関係において、五教会との結合は相互的 (bilateral) であり、四教会とは多角的 (multi-lateral) ではあるが、三つの基本的特徴点共通である。第一に、一九四三年以前にもいくつかの教会で方向性は明らかであったが、この期間に全部の九つの教会で完全な自治が達成された。教会が設立され、自らの指導層を選出し、国内の教会や関連施設を監督することになった。

第二に、第一期の海外伝道機関は、完全に解体されるか、もしくは地域でのLCA宣教師を支える補給業務に変更された。

第三に、第二期の間、程度の差こそあれ総ての教会はLCAの宣教師人員や経済的援助に依存しており、九教会のうち四つは欧米の他の教会や伝道機関などにも同様に頼っていた。

こうした推移は不可欠であり一般的にも受け入れられていたが、肯定的また否定的な反響をもたらした。肯定的には、かつて伝道を受けていた者が献身し、指導する者となったことである。自分たちの地域や地域外で、彼らは教会の伝道の機会と責任の双方を担った。これらの若い教会の真の土着化に向けて、巨大な一歩が踏み出されたと言える。否定的には、教会の政治化がある。外国主導のプログラムや施設が教会に引き渡されたが、それらを維持管理していくことは自分たちの能力を越えていることが判明した。現地での資源に乏しい教会への、高額な海外補助金の割り当てや維持に関して、問題が生じた。高度に訓練を受けた経験豊富な宣教師たちの誤用は、さまざまな緊張関係を引き起こした。

第一期から第二期への推移の経過は国によってたいへん異なり、それは宣教師の指導性の賢さや、若い教会の成熟度と規模、引き継がれた奉仕施設の数、そして移行の時点での地域的財政援助の度合いなどによるのである。

一九五八年にULCA海外伝道局は包括的な方針を採択したが、そこには第一期から第二期に移行する段階と、第二期でのULCAと海外の若い諸教会との関係の性格が描かれている。この決議は、一九五七年九月四日から八日までペンシルヴァニア州グリーンピルのティール大学で開催された国際協議会での調査結果と、世界中の教会や伝道機関、そして個々の人々からの批判的反応に基づいている。

LCAの世界伝道局は、この方針を若干改訂したものを、以後の時代の方向性を示すものとして採択した。この方針は、伝道に関連するすべてのプログラムや施設、当事国内の資産の転換、伝道機関の解消、そしてもし可能であり必要があれば財政援助を保証することなどを求めている。

第二期での二番目の発展は、九教会の地域以外の五つの新しい国々へと、伝道と関係の範囲が広げられたことである。LCGとの協議に従って、隣接したトリニダードの島での働きが開始された。チリとペルーでは、ドイツ語を用いるルーテル教会と協力して、スペイン語伝道が始まった。新しい伝道がウルグアイで始まり、それがモンテヴィデ

オでのエキユメニカルな奉仕活動と、リベラの単立教会という結果をもたらしている。LWFの優れた事務局を通して、LCAはサバ(以前のボルネオ)に位置するマレーシア・パーゼル・キリスト教会との、二五カ年限の関係に入った。第二次世界大戦の破壊的経験から立ち直り、宣教的、教育的な奉仕活動を拡大するための援助がなされたのである。

第二期で、LCAの伝道の役割に影響を与えた三番目の発展は、教会間の国際機関の形成である。

二〇世紀初頭の創始期を経過し、ルーテル世界連盟(LWF)は一九四七年にスウェーデンのルンドで正式に設立された。それは伝道、奉仕、研究、つまり福音の宣教、人々の必要への奉仕、そして神学的反省という、共通の関心に基づくプログラムを最初から継続してきている。

「信仰と職制」そして「生活と労働」などの運動から生まれた世界教会会議(WCC)は、一九四八年にアムステルダムで設立された。後にニューデリーでのWCCの第三回会議(一九六一年)で、一九一〇年にエジンバラで創立された国際伝道会議(International Missionary Council)もその組織に組み込まれた。教会間の広い視点から、WCCはLWFと同様に伝道、奉仕、研究など三重の関心事とかわっているが、特に他のイデオロギーや信仰を持つ人々との対話や、社会活動への強調が次第に顕著になってきている。

世界の物的必要と共同活動の効果に対する認識が高まってきたので、WCCとLWF双方の奉仕範囲は、この期間に大規模に拡大した。教会と国家の資源を活用しつつ、Lutheran World Service(LWR)とChurch World Serviceは、自然災害や政治・経済的分裂の犠牲者たちの救済に急行し、また、食物や健康などの日常の必要性において、人々の生活水準を改善するための特定のプロジェクトを支えた。

この期間に発展した主要な機関の一つは、アメリカを拠点としたLWRである。それは合衆国政府の資源の分与と受ける資格を有し、アメリカのルーテル教会員全体をも包括するような方法で設立された。

福音の宣教と人々の必要への奉仕は、上記に示されるように、第一期においては教会の海外伝道プログラムの相互関連的な一側面であったが、第二期の間に分離が拡大した。「伝道」という言葉は、言葉の上での福音の宣教と、キリスト者共同体の霊性の確立と拡大という教会の任務を定義するために用いられている。「奉仕」は、政治的あるいは宗教的帰属とは無関係に、世界中で物質的必要性を持っている人々に応えるという、教会の任務を表現するために用いられる。

第一期の伝道機関から若い教会に自治が移行する時に、豊富な財源のある、こうした国際的な宗教会議関係機関は、教会とはいくぶん独立して、世界中に救済開発計画を展開していった。この独立性は、莫大な需要、若い教会の規模と指導能力の弱体性、そして政府の資源を得る資格ならびに、伝道プロジェクトではなく奉仕のみを支援する欧米の世俗的寄付者の認可を得るために、奉仕と伝道のプログラムとの明確な分離を維持しなければならない、という必然性によって正当化されたのである。

第二期の間にもこの分離が存続したので、欧米の機関と若い教会は、神学的側面から伝道と奉仕の分離を公然と非難し始めた。それに加えて、幾つかの若い教会は、伝道と比較して奉仕に割り当てられる資源の量が偏っていることを憂慮した。この割り当て不均衡の問題に対する簡単な答えは、今日の、経済的に不平等な世界で、奉仕は伝道よりも多くの外的資源を必要とするということである。

伝道と奉仕の統合は、引き続き今後の課題である。たとえばインドでの「教会社会活動後援」(Church's Auxiliary for Social Action, C A S A と略) などのように、大きな必要をかかえている国で、国内の超教派的奉仕機関を活用し、より国際的な代表者による運営委員会を選出することによって、統合に近いものが手に入れられている。

一つの若い教会に複数の欧米教会や伝道機関が関与している国では、情報交換を促進し、参与を整合するために合同委員会が形成されてきている。

アフリカ、アジア、そして南米の、九つの LCA 援助教会のうちの四教会に関与するために、そうした協議会が設立されてきている。「ルーテル共同奉仕委員会」(Lutheran Coordination Service) は、ELCT のプログラムのために協同する、ヨーロッパと北米の伝道機関と一二の教会によって構成されている。中国地区共同委員会 (China Area Coordinating Committee, CACC と略) を通じて、六つの教会と伝道機関が ELCHK と TLC に関与している。日本国内共同伝道のためのルーテル協議会 (Lutheran Committee for Cooperative Mission in Japan, LCCMJ と略) は、関連する海外の六つの教会と伝道機関、そして日本福音ルーテル教会との合同事業を調整している。

要約として、第二期は三つの発展によって特徴づけられる。第一に LCA 関連の九教会は、国外の援助に依存しながらも、自治的なものになったこと。第二に LCA が新しく五地域に関与を拡大したこと。第三に今後の世界伝道における教会関与の本質についての深い合意のもとに、教会間の機関の一群が誕生したことなどである。LCA にとって、LCA 世界伝道局が伝道の次の時代での役割を問い始めた時、第二期はおのずと終結することとなった。

第二期から第三期への移行

LCA/DWME (世界宣教・エキュメニズム局) にとつて、第一期は宣教師時代 (一八四二年—一九四二年) であり、第二期は「若い教会」の時代 (一九四三年—一九六八年) であった。

DWME の運営委員会は、一九七三年一月の会合で、第三期を独立／相互依存の時代として表現することを選んだ。それは、独立した教会が互いに同意した目標の達成のために、相互依存の活動をもって、資源と努力を結集する時代である。第二期から第三期への移行は、三つの決定を実現することによつてもたらされた。これらの決定は三つの事項を扱っている。一、若い九つの教会による自給の達成、二、自給の達成に従つて、アフリカ、アジア、南米の関連九教会と LCA との関係の性格、三、その後の期間に合同活動が実施される方法である。

自給

上述のように、九教会は第二期には自治的になったにもかかわらず、まだ海外の財源や人的資源に頼っているところがあった。アメリカで開発された献身献財の原則と実際とが、ほとんどの地域で導入されたが、文化的相違や、海外の関連教会や伝道機関から容易に得ることのできる援助があったので、だいたいは効果がなかった。

一九世紀には、宣教学者や宣教師は、総ての教会は自ら伝道し、自ら治め、自給するべきである、という原則を樹立した。この原則は伝道地域で広く受け入れられたが、いつも実行されていたとは限らない。中華人民共和国が国家的に自存の道を進もうと決定した時、プロテスタント教会の指導者たちは、「キリスト者三自愛国運動」と呼ばれる組織を形成し、教会の眞の自治、自己拡大、自給の確立を援護した。今日、この活力ある組織は、三自運動として一般に知られている。

戦争で海外の援助が途絶えるという外部圧力のもとで、また、財政的危機によって国外の支援が漸減した時、多くの教会はこの三自的目標を達成したが、財政的依存からの独立という移行が、計画どおりに完全に成し遂げられた所は多くなかった。L C A 関連九教会のうち八教会が自給計画を採択し、一時は実現したが、種々の理由から不成功に終わった。それらの理由には、地域的な景気沈滞、自然災害、外国生まれの構造や職員と施設などを管理可能な水準に調節する困難さ、そしてこの窮境から解放しようとする豊かな海外教会の援助の無理強いなどが含まれている。一九七〇年代半ばには、ケニア長老教会のジョン・ガトゥー監督が抜本的提案を行ない、若い教会への国外からの財政的および人的援助を一定期間停止するように呼びかけ、国外の干渉なしに三自的目標を達成するように導いた。欧米の教会や若い教会の周辺で、一時はこの提案に対する感情的な賛否両論が交わされたが、その後は静かに協議事項から外されてしまった。

しかしながら、独立への肯定的な呼びかけは、忘れ去られなかった。世界中のさまざまな場所での討議や、一九六八年のLCA世界伝道局 (BWM) の二つの会合での講演と質疑応答などに従って、その年の十一月には伝道局が次の決議を行なった。

- 提案 (1)、BWMのスタッフは海外のBWM関連教会と交渉し、適当であれば合同協議会を通し、運営上の補助金を段階的に削減するように指示されること、
- (2)、この削減の日程と手順はBWMに提出され、一九七〇年二月の会合で協議決定されること、
- (3)、関連教会は、認められたプログラムには期限付きで資金が利用できることを、通知されること。

採択

(BWM議事録 六八一三六七、一九六八年一月一日—一三日参照)。

この決議は、もちろん、アフリカ、アジア、そして南米のLCA関連九教会に向けたものであった。決議の(1)と(2)の部分は自給の課題を扱っており、(3)項は今後の海外伝道への参与を、LCAがどのように考えるかを示している。自給の課題について考えた結果、教会の活動を四つのカテゴリーに分類することになった。それらは、個々の教会、中央行政機関、奉仕施設、そして神学教育である。

自給への過程における進展について報告する前に、自給の達成を目ざして、「交渉し……補助金を段階的に削減する」というLCA世界伝道局の決議に、九教会がいかに答えたかについて一言述べる必要がある。二教会は決議を是認して、直ちに肯定的な活動に移った。五教会は懸念が強く、この課題を受け入れるには交渉の期間が必要であるとした。二教会は決議によってたいへんに困惑し、交渉を拒否したので、世界伝道局は本意ながら一方的に段階的な補助金削減計画を実施せざるをえなかった。その後、この二教会のうちの一つは、熱心に自給目標を是認したが、残りの一つは、内外のさまざまな要因により、行動に移ることをためらい続けた。

自給の全交渉過程において、原則的には誰もが理念を支持したが、指導的立場の人やそれ以外の人々、そして信徒や教職者を問わず、それがいかにして達成されるべきかについては意見が分かれるということが明白になった。ある人々は、決定的な行動に移る時が来たと確信した。他の人々は、まだその時ではないと感じていた。豊かな欧米の教会と成長過程の若い教会のそれぞれの責任と同様に、地域教会の潜在能力や現行の構造やプログラムの多様性についても、もっと熟考されるべきであると彼らは要望した。世界伝道局は、今後の過程では、資源、構造、そして相互的責任が注目を集めるだろうと信じつつ、明らかに行動を起こすことを支持する側に立った。

交渉の結果、下記に示された年度に、個々の教会と中央行政機関という範囲内で自給達成するという決定を、九教会のうち八教会が行なった。

教会名

各個教会の自給

中央行政機関の自給

アンドラ福音ルーテル教会 (AELC)	一九七八年	一九八二年
香港福音ルーテル教会 (ELCHK)	一九八三年	一九八三年
タンザニア福音ルーテル教会 (ELCT)	未定	未定
日本福音ルーテル教会 (JELC)	一九七五年	一九七五年
ギアナ・ルーテル教会 (LCG)	一九八〇年	一九八〇年
リベリア・ルーテル教会 (LCL)	一九八二年	一九八三年
マレーシア・シンガポール・ルーテル教会 (LCMS)	一九八〇年	一九八〇年
台湾ルーテル教会 (TLC)	一九八一年	一九八一年
アルゼンチン合同福音ルーテル教会 (UELC)	一九八〇年	一九八二年

こうして、一九六八年の決定から一五年後の一九八三年には、九教会のうちの八教会で、各個教会と中央行政機関

の事業のための支援は終わることになる。

九教会での経験は確かに同じではないが、彼らが自給の問題と苦闘した一五年間に、ほとんどの教会で次の五つの分野での進展があったことは興味深い。

第一に、教会は自分たちのものであり、教会の存続と伝道への取り組みが、自分たちの財政的支援に大きく依拠していることを教会員が自覚した時、教会への献金額に著しい増加がみられたことである。日本福音ルーテル教会の場合、一人当たりの献金額は、LCAの三倍以上である。リベリアでは、教会年次総会の予算会議で賑やかに競い合いながら額を決めるのだが、全体教会を支える各個教会の誓約額は大幅に増加した。

第二に、経費節約のため、各個教会の構造が変えられ、教勢進展のない所では教会は閉鎖され、いくつかの小さな教会は統合され、そして弱い重要な存在の教会は強力な教会と結合されたのであった。

第三に、より土着化し財政的にも成長力を増すために、中央行政機関が再編成された。若い教会の維持管理能力を越えて、第一期の伝道機関の責任を負い奉仕施設を支えることは、特に解決困難な問題を提起した。この問題を考える会合での交渉の最中に、若い教会の教職が、欧米の教会の交渉者に向かって何度かこう言った。「あなたが始めたものです。あなたが代価を払うのです」。総ての教会が、本部人員を雇う必要を感じていたが、本教会の指導者が専任か兼任であるかについては意見が分かれた。現在のところ、四つの教会（アフリカ 二、アジア 二）では最高指導者は専任であり、残る五教会は兼任である。

第四に、教会が伝道の役割について再考察することが重要になってきた。教会で給与を払っている牧師の数を制限あるいは減少すること、テントメイキングで自活する牧師の活用を増進すること、男性「伝道師」や「婦人聖書教師」の役割を若い教会の草の根的レベルで再考すること、そして教会生活の種々の分野で信徒ボランティアを創造的に用いる工夫などが必要かも知れない。

第五に、ほとんどの教会は、教会の土地・建物を、会合や、店舗、農業プロジェクト、駐車場その他のために賃貸することによって、教会外の地域的財源を開発している。幾つかの教会では、日本の大阪にあるホテル・ザ・ルーテルや、タンザニア・アルーシャにあるホテル／事務所兼用ビルのように、収益事業の目的のためにビルを建設している。教会員の貢献にばかり依存しないように、収益事業からの資金の運用割り当ての必要を、諸教会は敏感に感じている。

責任ある自治教会が、どのようにしたら教会の奉仕施設を自給のレベルに引き上げることができるといふことが、他の一連の問題を提起した。九教会を通じて、奉仕施設には四つのタイプがある。それは、農業、教育、医療、社会福祉である。インド、リベリア、タンザニアの教会は、それら総てに関与している。アルゼンチン、香港、日本の教会は教育と社会福祉の仕事を持っており、ギアナは教育と農業、そして台湾は医療に限られている。初期の時代に、マレーシアとシンガポールにあったLCA関連教会は、広範な診療所兼往診設備を有する医療体制を持っていたが、一九七一年には閉鎖してしまった。現在そこでは、施設の働きはなされていない。

圧倒的な需要に依えて、これらすべての施設は創設された。多くの場合、それは独特で革新的なキリスト教的配慮の表現ではあったが、それらが存在する国々での新しい発展は、それらの有効性に關する再評価を求めている。アフリカやアジアの社会主義国は、政府の事業を通して自国民の教育、健康、社会福祉の必要を満たそうと目ざしている。非社会主義国では、政府の社会事業拡大に加えて、さまざまな理由により多数の地域の人々や機関もまた関与している。施設事業の経費の上昇もまた大きな問題である。

この複雑な状況にもかかわらず、施設を一つ一つ別個に考えてみるのが適切であろう。そうすると、いくつかの一般的な傾向が示される。多くの場合、小学校は政府に引き渡されたり、政府の補助金を受けるようになっていく。中等教育では、幾つかの場合には学生の学費から追加的資金を捻出してはいるが、やはり同様の変化が起きている。

実際に、ある国々では、中等教育のみならず大学教育までも投機的事業とみなされているのである。医療と社会福祉施設は、地方自治体に引き渡されたり、教会や政府そして地方の福祉団体で分担された負担金のもとに機能することになった。貧しい人々の救済を補助するために、ある病院では、支払い能力のある患者には比較的高額な料金を請求することにしている。中華人民共和国では、社会事業におけるキリスト教会の役割を限定する最も急進的な行動がとられたが、それは共産党政府がいつも簡単に教会の総ての奉仕施設を国営化した時であった。

この変化の過程の中で、既存の施設の必要性や有用性についてだけではなく、今日の社会でクリスチャン個人や教会がいかに人々の必要に奉仕できるかという疑問についても、教会は苦悶してこなければならなかった。総ての教会が各々の状況の中でこの問題に対処しなければならぬし、D W M Eも今後の社会事業における参与の性格を限定しなければならぬ。

自給の分野で最も困難な問題は、神学教育の支援である。各個教会の自給は、比較的に易しい。中央行政機関の自給は困難ではあるが、可能である。奉仕施設の自給は複雑であるが、解決の道はある。神学教育の自給は、独特で複合的な種々の障害に直面している。

発展していく教会のためには、その国の働き人を養成する必要があることを、宣教師たちは全九地区において実際に経験した。彼らは、一般信徒や教会に雇用される者のために聖書学校を、そして按手を受ける教職者の養成のためには神学校を建てた。第一期と第二期において、これらの施設は、海外関連教会や伝道機関の補助をほとんど完全に受けていた。

財政や立地などを含むさまざまな理由により、神学教育は、超教派的か少なくともルーテル諸教会合同の方向に動いてきている。タンザニアは例外として、聖書学校は、閉鎖されたり、地域で教会職員や信徒を訓練するための比較的経費の安い付属的プログラムに変更されたり、置き換えられたりしている。これらの訓練プログラムは、土着化し

た教会によって開発された新しい伝道形態へと、人々を準備するために構成されている。神学教育の経費については、それを軽減する工夫に加えて、若い教会は自らの財源から支援を始め、地域での、外部からの支援の手段も開発してきている。それら二つは、収益目的のための、神学校の土地建物の活用であり、寄付金制度の確立である。関係者全員の保護のために注意深く同意されたガイドラインに従いつつも、ある場所とある段階での神学教育は、無期限に国際的援助を受ける必要があるのではないだろうか。

「教会と教会」の関係

第二期から第三期への移行についての二番目の決定は、一九七六年一〇月にDWM Eの運営委員会でなされた。

提案 (1)、歴史的関係に照らして、アフリカ、アジア、南米のL C A関連九教会には特別の認知を、銘入り楯の形で与えること、

(2)、それらの教会へのL C Aの関与はプロジェクト上のものとなり、その諸条件は交渉の過程で同意されるものとする、

(3)、L C Aはさらに、これらの九教会と、すべてが構成員であるL W Fの国際機関と、幾つかが提携しているW C Cを通じて接触すること。

採択

(議事録M—七七—〇六二、一九七七年三月一四日—一六日、二六ページ参照)。

この決議の第一項は、アフリカ、アジア、南米の九教会とL C Aとの、創設期からの歴史的結びつきを記している。それは特に、自給達成の面において、彼らの、L C Aからの完全な独立を是認するものである。

第三項は、L C Aが他の教会ともしているように、これらの九教会ともL W FとW C Cを通して関与するというこ

とである。

しかし、第二項が示すように、LCAは独立と相互依存の原則のもとに、九教会と伝道協力を継続するものである。この関係の問題に関して、九教会は、一九六八年以前には提携教会と非提携教会との二グループに分けられていた。提携教会は、AELC、LCL、LCG、そしてUELCであった。AELCの連合規則には、こう記載されている。「AELCは、本国のボードを経由して、ULCAと連合シノッドとして責任を果たす。運営会議は、内規に決定されているように、ULCAの隔年の大会のために公的代表者を選出する」。「連合シノッド」の概念は、ULCAの伝統的な伝道方策の一部であり、やがて「提携教会」の関係へと展開していったのである。

非提携教会（分類上の記述）はELCHK、ELCT、JELC、LCMS、そしてTLCであった。一九六八年での、それらの教会のうち四つの共通点は、多角的な海外関係に由来していたことであり、五番目のLCMSは、一九六三年の発足時にはLCAに本質的拘束を受けていたが、提携教会としては定義されていなかった。

連合シノッドと提携教会の概念は、オーガスタナ・ルーテル教会の慣例にはなかった。

世界伝道局の勧告によって、LCAは一九六八年のアトランタ大会で、四提携教会の名前を憲法から削除した。理論的には、九教会全部と形式的関係に移行するか、四教会との提携教会関係を捨てるか、どちらかの選択の余地があったのである。

この憲法上の削減は三つの主要な合意事項を含んでいた。全九教会はLCAの支配から完全に自由であること、彼らは、地方や地域で、そして国際的な舞台で、ルーテル教会間や超教派的な関係をもつように奨励されたこと、彼らとLCAとの新しい関係の枠組みが要請されたことである。

世界を見渡してみると、「教会と教会」との関係には、少なくとも六つのモデルがあることに気づく。それは、伝道教会モデル、パートナー・モデル、組合モデル、連邦モデル、国際モデル、そしてプロジェクト・モデルなどであ

る。

伝道教会モデルは、一方的な主客関係であり、そこではある教会機関が受け入れ側の教会に資源を提供し、任務の達成を援助するものである。このモデルは、中国地域共同委員会 (China Area Coordinating Committee, CACC と略) や、タンザニアのルーテル共同奉仕 (Lutheran Coordination Service, LCS と略) のような合同委員会と同様に、多くの伝道会によって用いられてきた。教会の広範な伝道は、単立あるいは教会の枠を越えた機関の努力によってのみ達成されるのであり、新しい教会が生まれ、そこから逆に伝道会が誕生して、継続的に国家を超えて伝道課題を遂行していくものであると信じている人々もいる。このモデルの有利な点は、熱意であり、単一事業機関を運営する容易さであるが、不利な点は、伝道と教会の有害な分離である。

パートナー・モデルというのは、二つの教会が相互的な合意に達し、双方の人員的および金銭的資源を集約して、合意された場所や活動での教会の伝道を遂行するものである。このモデルは、若い教会が、自分たちの創設者である海外の教会や伝道機関と対等関係を持つために自治状態に達したとき、一般にみられる次の段階である。パートナー教会モデルは、一九六八年以前の LCA 憲法に記載されている提携教会の概念を意図したものであることが明白である。このモデルの有利な点は、歴史的関係において、それが自然な次の段階であることである。不利な点は、恩情主義的過去の不本意な永続化である。

組合モデルは、所定の地域で活動している海外伝道機関と自立した地域教会が合同協議会を形成し、そこで特定の目標を達成するために、資金と人員の共有を通して、全員が参加者となるものである。LCA 関係でのこのモデルの例は、日本のルーテル合同伝道協議会 (Lutheran Committee for Cooperative Mission, LCM と略) である。このモデルの有利な点は、主客関係が少なくとも理論的には除かれていることである。不利な点は、協議会での交渉がどんなに開放的であっても、当事国の教会は、外部のかかわり合いの比重に圧倒されてしまうことである。

連邦モデルは、伝道をはじめた伝道会や教会と、彼らの初期の活動の結果として第三世界にできた教会とによって、連合が形成されるものである。LCAの文脈で、このモデルの意味するところは、LCAとアフリカ、アジア、南米の九教会が、計画、財務、人事を行ない、そして自国の境界内と世界各地で伝道を遂行し、教会の連邦を形成することである。改革派パリ福音伝道協会 (Reformed Paris Evangelical Missionary Society) は、このモデルを選択した。このモデルの有利な点は、完全な分かち合いが現実化されることである。不利な点は、連合教会が、その地方や地域での他教派の教会と離れてしまう傾向である。

国際モデルは教派包括的であり、教会の世界伝道を遂行するために構成単位の資源を結集し、統一された機関決定過程と構造によって団結した、地球規模の共同団体である。ローマ・カトリック教会がこの例である。ルーテル諸教会にとって、このモデルは、LWFが世界を包括する教会となることを要請するものであろう。神学のおよび教会的問題を度外視するならば、この利点は、ルター主義が声を一つに合わせ、世界中の活動において同調できることであらう。不利な点は、しばしばクリスチャン社会全体が絶対少数者に過ぎない自国内で、ルーテル教会員が仲間のクリスチャンたちから遊離してしまうことであらう。

プロジェクト・モデルは、伝道機関や教会が所与の教会や機関と協力し、交渉の過程の中で人員や財務協力の範囲について合意し、限られた期間内に特定の活動をするものである。この方法は、プロジェクト関与者は独立しており、相互依存的活動において合同するという見解に基づいている。このモデルの有利な点は、お互いへの不健全な依存を助成するほどには、構成員が巻き込まれないことである。不利な点は、取り組みが大いに臨時的なものになるかも知れないので、真の相互依存の精神が発露しないことである。一九七六年の決議が示すように、LCA/DWMEは、このプロジェクト・モデルを選択した。

プロジェクト協力

DWMEの第三の移行決議は、他の二つの決定を組み入れている。以下がそれらのものである。

関連教会は、適切なプログラムのためには期限付き条件で資金が利用できることを、通知されること（一九六八年一月）。

これらの教会の関与は、交渉の過程を通して同意された条件における、プロジェクト上のものであること（一九七六年一〇月）。

LCAは、これまで関係してきたアフリカ、アジア、南米の九教会が独立したものとなり、必要とあれば、LCAや他の外国の資源からの援助なしに存続できることを認めるに至った。自給教会は、アフリカの独立教会、南米のペンテコステ派の教会、あるいは中華人民共和国の教会に類似しているかも知れない。しかし、LCAは、世界中でこれらの主の伝道を遂行するために、現地あるいは他の場所で、それらの教会とプロジェクトを達成する努力に、積極的に加わる用意がある。これらの教会とLCAは、すべての場合において、LCAの関与の範囲を限定する要因があることを認めている。これらの限定要因としては、教会の規模、所与のプロジェクトのために若い教会が貢献できる資源の量、あまりに大きく不得策な外部からの財政的および人的参与、そして世界の国々での多様な国民性などがある。過去数年間に、LCAの財政的および人的参与の範囲が九教会の地域で減少した理由のいくつかは、これらの事柄である。

プロジェクト方式は門戸を開き、海外伝道でLCAが三〇以上の国々へと参与を拡大する媒体となったのであり、そこで他のルーテル教会、他のキリスト教会、そしてWCCを含む多数の超教派的機関、すなわち全アフリカ教会会議 (All-Africa Conference of Churches) 、アジア・クリスチャン会議 (Christian Conference of Asia) 、カリブ教会会議 (Caribbean Conference of Churches) 、ラテン・アメリカ教会形成協議会 (Latin America Council of Churches)

in Formation)」、そして南アフリカ教会協議会 (South Africa Council of Churches) などとの協力が生まれた。
この推移の過程がほとんど完了し、LCAは第三期に入りつつある。
(つづく)

編者メモ この論文は、一九五一年にアウガスタナ・シノッドからの最初の宣教師として来日、東京(田園調布)や広島で働き、当時の山陽部会形成に貢献し、のち、帰国して、世界伝道局のアジア担当幹事、さらに総幹事として奉仕され、引退後の現在はシカゴでルーテル神学校客員教授であられるウィクナー氏が、総幹事在任の最後の時期に、一九八二年九月のLCA総会の参考資料「Called to Global Mission」(372 pp.)に寄稿された「LCA in World Mission 1842-1982」の全訳である。『百年史論集』の計画をお話しして、この論文の紹介を願ったところ、部分訳にせよ、全訳にせよ、編集者が適当と思ふかたちでの紹介を特別にお許しくださったもので、ここに記して感謝するものである。なお、翻訳は中川俊介牧師の貢献による。

山内量平評伝（その一）

坂井 信生

はじめに

本稿は山内量平先生の略伝であり、合わせて、先生の伝道のよき助け手であった幹枝夫人についても言及する。

周知のように、先生は日本福音ルーテル教会初代邦人牧師であるばかりでなく、博多ルーテル教会にとつて、草創の労を一身に担われた初代牧師でもある。一九八六年（昭和六一年）に博多ルーテル教会は宣教開始八〇年を迎え、それを記念して『博多ルーテル教会八〇年史』の刊行が企画され、教会史にはまったくの素人である筆者に執筆の責が委ねられた。そこで、筆者は必要にせまられて、多忙な本務の合間に、山内先生に関する資料収集を若干試み、同書に先生の経歴と事業のあらましを概述したのである。本稿ではそれと重複する部分がかなりあるとはいへ、八〇年の通史全体を鳥瞰するという同書の性格から、省略せざるをえなかつた部分もあり、ここに改めて先生の人となりと業績を概観することは、それなりに意味をもつといえるであろう。加えて、先生に関する論考をほとんどみない現状に鑑みて、この至らざる小論が本格的な山内研究の現われるまでの踏石にでもなりうれば、との願ひも否定できないところである。

さらに、私事にわたることを許されたいが、筆者の曾祖父、祖父は佐賀教会在任中の山内先生に親しく薫陶を受け
ており、共に教会理事（今日の役員）をも勤めている。祖父母の結婚式は先生の司式と伝えられている。父は先生の

離佐直後に誕生しているが、先生が佐賀を再訪されたおりに、おそらく先生の祝福を受けたことであろう。そして今日、先生が創設された博多ルーテル教会に所属している筆者が、ありし日の先生とその事業をこのように再現することは、何とも不思議な縁と思わざるをえないし、むしろ欣ぶべき義務とすら感じるのである。

本稿においては、先生の前半生すなわち誕生からキリスト教への回心、そしてルーテル教会宣教師との出会いに至るまでを取り扱い、次稿において、ルーテル教会人としての先生の、佐賀および博多における教会創設の事業について明らかにしていきたい。

一、第一期 和歌山時代

(一)、山内家と若き量平

山内量平は一八四八年（嘉永元年）八月八日⁽¹⁾、紀州日高郡北道村（現在の和歌山県日高郡南部町⁽²⁾）に、父山内繁憲、母三千代の二男として誕生した。幼名は亮次郎、ついで憲孝⁽³⁾、のちに量平と改めた。

山内家は南部郷きつての旧家であり、現在の紀州信用金庫南部支店から海岸にいたるまでの場所で、「松屋」を屋号とする醸造業を営み、苗字帯刀を許された豪商であった⁽⁴⁾。山内家はもともと相模国山之内の在で、上杉姓を名のつていたが、故あつて伊勢に移り、故郷の山之内と改姓、さらに一五七七年（天正五年）紀州南部に來り、松原を開墾して一村を築いた。屋号「松屋」はこれに由来するという。今日、南部町大字山内の新福寺に山内家の祖先の墓があるが、この寺の建立にも山内家は大きな力となっている⁽⁵⁾。のちに北道村に出て、前記のように醸造業を営むのである。

量平の祖父繁樹は、江戸時代を通して南部出身者中最も著名な国学者であり、国学のみならず古史、歌道にも精通

し、本居宣長の四高弟の一人にも数えられている。さらには、数術にも心を寄せ、その教えを受ける者あまたであったと伝えられている。父繁憲も国学、漢学のほかに諸芸をたしなみ、「書画、詩歌、馬、茶花、能楽、俗曲に至るまで通ぜざるはなし」と言われたほどの粹人であった。しかもその性格は温和にして寛容であったので、山内家には紀州内外の文人墨客が絶えなかつたという。繁樹、繁憲の墓は南部町の法伝寺内に建立されており、「繁樹大人奥都伎」と刻された繁樹の墓石は南部町指定の文化財となっている。⁽⁶⁾

さらに、山内家は近在の旧家と共に、平安時代に京都八坂神社より勧請し、南部荘の総鎮守として祭祀されている郷社須賀神社の祠掌を出仕する家柄でもあつた。『須賀神社誌』によれば、父繁憲は一八七二年(明治五年)から没する一八七九年(明治一二年)まで祠掌をつとめている。⁽⁷⁾ 神道教導職が山内家代々世襲であつたとの記録もあるが、これは誤りというべきである。繁憲自身神道教導職をつとめた可能性があるとはいえ、教導職の制定は一八七二年(明治五年)だからである。

このような境遇の中に生まれ育つた山内量平は、幼少時より祖父、父を通して国書漢籍そして詩歌といった、当時の文人としての教養を充分身につけていった。晩年、山内が博多ルーテル教会を辞するに際して催された送別会の席で、数百首に及ぶ和歌を披露して、列する者をして感歎せしめたことが伝えられているが、その素地はこの幼少時に植えられたものであろう。また、山内の長姉玉枝が近くの浄土真宗勝専寺住職志場了善に嫁していたことから、義兄了善は山内に仏道を講じ、読経の法をも伝授したという。のちに山内が三部経のごときは全部誦んじていたと述懐するところからすれば、かなりの宗教的感化を受けていたことがうかがわれるのである。⁽¹⁰⁾

長じて、紀州田辺藩の藩校修道館の教師、あるいは巡查部長などの官職に就いていた山内は、父繁憲の死に出会う。すでに長兄松彦は夭逝していたために、山内は二男であつたがこれら一切の官職(一説によれば、一七を教える官職に就いていたといわれる⁽¹¹⁾)を辞し、山内家と家業「松屋」のすべての責任を継ぐべく、南部にもどつてきたのである。

おそらく、一八七九、八〇年（明治一二、三年）のことと推定される。

山内は一八八一年（明治一四年）五月一七日、川瀬幹枝（みき江と記すこともある）と結婚した。幹枝は父を川瀬六郎左衛門、母を始代といい、一八六三年（文久三年）日高郡藤田村の生まれである。川瀬家は同郡志賀村（現南部町）の大庄屋で一万石の領地を統率し、郡奉行よりもはるかに名望のある家柄であった。幹枝の結婚時には父六郎左衛門はすでに亡く、兄楠之丞が家督を継いでいたが、一八八九年（明治二二年）大和十津川の大洪水のおりに不幸にして水死する。妹くには、のちに山内の世話で山内紋作と結婚、一子松枝をもうけるが、くには田辺で、紋作は東京で死去。山内一家に引きとられた松枝そして始代も佐賀で病死したために、川瀬家を継ぐ者がまったくいなくなり、一九一〇年（明治四三年）博多ルーテル教会出身で当時路帖神学生の入江徳太郎が、幹枝の懇請をうけて川瀬家の家督を相続することになる。¹³のちに、八幡ルーテル教会を四〇年余にわたり牧した川瀬徳太郎である。

ほどなくして、山内にとり大きな転機となる一つの事件がもち上がるのである。ある年、課税のことから税務官吏と衝突し、つまるところ、在庫中の酒樽全部に封印を貼られてしまい、出荷の時期を失して莫大な損失をこうむった。¹⁴そのため、父祖伝来の家産は一朝にして傾き、近郷にきこえた豪商「松屋」も没落の運命を免れえなくなつたのである。山内は時の和歌山県知事に対し、損害賠償の訴えを試みるのであるが、不運は重なり、税法改正のためにあえなくも敗訴に結果する。その責任をとるべく、当主山内は「これら重々の遺恨に心は乱れて時期あらば当の敵なる知事某を一刀の下に斬捨てやうと覚悟した」という。¹⁵この苦悩のどん底にあつて人生の悲哀を体験していた時に、山内はすでに幾許かの知識を妹季野を通して有していたキリストの福音に、はじめて積極的に耳を貸すことになるのである。

（二）、妹季野と熊子

ここで山内の妹季野について語らなければならぬ。季野は山内家で最初にキリストにとらえられ、兄量平をはじめとする山内家の人びとにキリストを伝えた人であり、のちの植村正久夫人である。

季野は好学の家に育ち、天分にも恵まれており、諸学諸芸を修め、書画をよくした。彼女の号「秋華」はこの才能を愛でた富岡鉄斎が贈ったと伝えられている。女性の身ながらも和歌山の漢学塾に男性と共に学び、さらに東京への游学を志し、横浜に新設のミッション・スクール、フェリス女学校に入学するのである。⁽¹⁶⁾

季野が官立の東京女子師範学校でなく、フェリス女学校をあえて選んだのは、創立者キダアの人格とその校風に心を寄せ、かつ生徒兼教師という有利な経済的条件があつたためと推察される。彼女はキダアの感化によつて、キリスト教に深く心をとらえられ、一八七七年(明治一〇年)横浜海岸教会でミロル(ミラー)から受洗した。やがて数年のち、季野は奥野昌綱を介して、植村正久から結婚の申し込みをうけ、一八八二年(明治一五年)東京下谷教会で結婚の儀を挙げるのである。この婚約期間に、両者の間で多くの書簡が交換されている。それによると、正久、季野の最大の関心事の一つは、山内家の人びとの信仰のことである。南部に帰省中の季野に、正久はつねに祈りと励ましの言葉をあたえており、キリスト教書も幾度か送付している。とくに、兄量平に読んでもらうためであつた。⁽¹⁷⁾

季野の祈りの初穂はすぐ下の妹熊子である。叔母喜代子(父繁憲の妹)の婚家、味噌醬油製造業の楠本家の養女となり、定六を婿に迎えていた熊子は、季野を通してキリストを知り、当時、紀州伝道に従事していたアメリカ・カンバールランド長老教会宣教師ヘール兄弟と接触をもつていた。彼女は楠本家で強要される仏教行事に耐えかねて、離婚を覚悟で三人の子供を伴つて山内家に戻り、ヘールに受洗を志願するのである。このことを聞いた山内は烈火のごとく怒り、熊子の受洗に反対するのみか、彼の意向を無視してそれを強行しようとするヘールの殺害をも計ろうとする。しかし、周囲の諫めとヘールの授洗延期の申し出もあつて、この場は一応落ち着くことになるが、熊子は二カ月のうちに、三人の幼な子を残り、二八歳の若さで未受洗のまま急逝するのである。⁽¹⁸⁾

このように、季野の祈りは熊子の熾烈な信仰となつて結実し、さらに彼女の安らかな死が、その受洗に猛反対をしていた兄量平、夫楠本定六、そして仏事を強要していた姑の喜代子の心奥に大きな衝撃をあたえたことは想像に難くない。やがて、量平はヘルルから洗礼をうけ、熊子の長女綾を養女として手もとに引きとり育てるのである。定六、喜代子も続いて受洗、山内と共に新設の田辺長老教会の中心的信徒として活躍することになるのである。

(三) 山内量平の回心

ここで話題を再び山内量平にもどすことにしよう。

右にのべた山内の妹たちの動き、すなわち、季野の受洗と家族のための熱誠あふるる祈り、その結実としての熊子の信仰、そして死、これらが、非条理的な権力によつて父祖伝来の家産を失つた山内の心を動かさなければならなかつたのである。

一方、ヘルル兄弟は大阪を拠点に紀南伝道を続けていた。J・B・ヘルルはのちに『日本伝道記』(Twenty-Five Years in Japan)を著わしているが、それによれば、一八八四年(明治一七年)五月九日、ヘルルとそのヘルパー大石余平は南部に着き、山内の弟光清および甥で勝専寺住職の志場邦雄(了般)に会っている。志場はこれまでもヘルル兄弟の説教会に出席していたが、それはキリスト者となるためではなく、むしろキリスト教の何たるかを知り、より効果的にキリスト教を論破するためであつたという。そして、翌一〇日に彼らが田辺で定宿としている「五明楼」なる旅館に、山内が訪ねてきたことを次のように記している。¹⁹⁾

翌五月一〇日山内氏が面会に來た。われらはキリストの求めを強く彼に説きかさせた。彼は、これよりも前から洗礼を受けようとしていたが、その職業はキリスト信者として不相応なものであると語つた。彼は酒の醸造業者

なのだ。……彼は自分の飲酒と喫煙を止めることはできた。しかし自分の店を閉めることは大きな苦悩の種であった。「人が全世界をもうけても、自分の生命を損したら何の得になるうか」というキリストの言葉がそのままあてはまる状態にあった。

一二日の朝山内さんが南部からわれわれを訪ねて来た。彼は非常に多くの質問を持っていた。大石さんが自分のキリストへの回心と最近の体験について彼に説明した。長い間話し合った後、彼は帰った。彼は帰ってから三〇分くらいしてまた戻って来て、大石さんと呼んで、言葉も途切れながら言った。「私はけがれた罪人です。私は赦されたいのです。私は何をすべきでしょう」。大石さんは長い間、彼に話をした。

一三日の朝われわれが床を離れる前に山内さんがまたやって来て、午後四時頃までいた。彼は商売をやめることに決心し、実行し、自分も禁酒し、自らをキリストに捧げた。その晩、彼はイエスを信じ、その血に洗われたキリスト教徒となって家に帰った。

『日本福音路帖教会史』(『二〇年史』)にも、J・B・ヘールおよび大石余平との面談、そしてそれに続く山内のドラマチックといえる回心の顛末が克明に述べられている。⁽²⁰⁾おそらく山内自身の口から出た物語であろうと思われる。

この『二〇年史』に登場する山内回心の場である名勝芳養の海岸は、今日では、松並木も無残に切り倒された国道四二号線沿いで、昼夜を分かたず車の列は絶えることなく、騒音は周囲にこだまして、昔日の静寂とはうって変わった様相である。もちろん、山内が五明楼に徒歩で引き返すために馬を預けたという掛茶屋もなく、ただその掛茶屋は「牛の鼻」バス停前の民家の庭先あたりであったというのみである。山内がヘールから洗礼をうけた五明楼も今はない。「伯扇閣」なる名の近代的光景ホテルのある場所が、かつて五明楼が建っていたところであるという。

『信仰三十年基督者列伝』の編者の記すところによれば、家業である酒造業を継いだ頃の山内は、「剛腹放胆なる武刃者は到底商売の器にあらず、幾何もなく家運頓に衰ふるに至れり」といった状況であった。しかし、受洗後は「而してその性格たる剛腹尊大の風は後を絶ち、柔和謙遜、全く別人と生れ変りしには何人も驚ろかざるはなかりき」と⁽²¹⁾伝えている。

ヘールの一行は田辺で山内に授洗したのち、新宮伝道に赴き、大阪への帰路再び田辺そして南部に立ち寄った。そこで、山内の妻幹枝は洗礼を志願したのである。彼女はすでに義妹季野から福音を聞いて、キリストへの信仰を有していたにもかかわらず、夫山内を恐れてそれを内密にしていたという。しかし、夫が受洗したことを聞き、早速ヘールに受洗を願ひ出たのであった。ヘールはその夜のことを歓喜にみちた表現で次のように記している。「山内さんの家の中は、平安と喜びに満ちていた。洗礼の後、この村で初めての聖餐式を行った。私の思いはこの家で過した最初の夜に帰っていった。その夜、今共に聖餐にあづかっているこの人（山内量平）が今天国にある妹（熊子）が夫（楠本定六）のもとに帰って公然と偶像を拜むように、私に勧めさせようと一晩中私を説得につとめ、二人の妹（季野と熊子）が階下で祈りながら待っていたのであった。妹たちの祈りが勝った。楽しい聖餐式であり、輝かしい勝利であった⁽²²⁾」と。のちに、牧師の妻としてまた婦人伝道師として、夫量平を助け、共に伝道の業に従事し、佐賀そして博多の地においてキリスト教主義幼児教育にたずさわる幹枝の新生の日、六月一五日のことである。

四、新しい生活

右に述べたように、山内家の当主量平の受洗は、さらに妻幹枝の受洗をもたらし、あたかも堰を切ったかのように、山内家の人びとが次々と受洗するのである。山内の母三千代、熊子の夫定六が同年に、翌一八八五年（一八年）には熊子に仏事を強要し、受洗に強硬に反対していたキリスト教嫌いの姑の喜代子（量平の叔母）も受洗、田辺教会で「雨

が降つても鳥の鳴かん日があつても、楠本のおばあさんの教会に来ん日はない」と言われるほど篤信のキリスト者となるのである。²³ 弟の光清、妹信恵をはじめ、甥で勝専寺住職の了般、その弟了達²⁴（のちの田中達）にいたるまで、山内家一統はまたたく間に全員が受洗、クリスチャン家族を形成するのである。当時の家長を中心とする家族制度の強さと共に、当主量平の影響力の大きさを垣間みる思いである。

人生における「コペルニクスの転回」とも言いうるこの体験ののち、山内量平、幹枝夫妻は、父祖伝来の醸造業「松屋」に終止符をうち、一八八五年（一八年）一月に南部から田辺に居を移した。酒に代わつて酢や醬油の醸造をはじめ、山内はその行商をするかたわら、キリスト教の伝道に専念した。²⁵ 日中は得意先を作るために田舎まわりをし、夜には青少年を集めて教理問答と聖書を教えたという。²⁶

山内受洗の翌年一八八五年（明治一八年）四月二三日、山内を中心にした田辺の信徒たちは一軒の家を借りて教会とし、初代長老に山内を選出して「田辺長老教会」を設立、J・B・ヘルを迎えて開所式を行なっている。田辺教会はヘル伝道により組織された五番目の教会であった。「彼らは人数は少なかったが、信仰は強力であった。彼らの借りた講義所はたいへん大きい家だったので、修繕や家賃などが彼らに重くのしかかっていた」とヘルは記している。²⁷

さらに、ヘルは日本人のヘルパーないし伝道協力者の必要性を感じ、その養成のための神学クラスを組織した。第一期を大阪で、第二期を田辺で、それぞれ二カ月間、神学、教会史、説教、牧会学その他を教授した。このクラスには五名の者が集まったというが、山内もその一人であった。²⁸ すでに、植村正久から送られたキリスト教書に親しんでいた山内は、それらに加えて、師のA・D・ヘルが一八八四年（明治一七年）に、本間重慶の訳で出版した『神学入門』（大阪福音社刊）を愛読したことであろう。仏僧からキリスト者となり、のちにルーテル教会に転じて佐賀、唐津、直方教会などの牧師を歴任した和佐恒也、山内に強く回心を迫った大石余平、山本周作、久世徳蔵、そ

れに山内量平といった神学クラス受講者は、田辺平信徒伝道団なるグループを組織、熱心な伝道活動にいそしんだ。
 『明治初期の紀南キリスト教』の編者田所双五郎は、「これは『紀南バンド』とも称せらるべき事実」であると指摘している。²⁹⁾

(五)、田辺長老教会

前項に述べたような経緯で設立された当時の田辺長老教会の『教会日誌』を見ると、日曜午前の礼拝における司会、説教（聖書研究）は、ほとんど山内の担当であり、この教会のまさに中心人物であったことをうかがわせる。明治一八年度の『教会日誌』から、その一、二を紹介しておこう。この頃の山内は「ルカによる福音書」の連続講解を試みている。

八月二日 日曜日 晴 司会者 山内

讚美歌 八十四番 百二番

祈祷 始 山内 終 主禱文

聖書研究 路加伝十一章十四節ヨリ二八節ニ至ル迄デ

信者 十一人 男七人 女四人 客人三人 聴衆無

九月十三日 日曜日 晴 司会 山内

讚美歌 六十九番 八十七番 四十六番 十一番

聖書研究 路加伝十三章廿二節ヨリ三十五節マデ

信者 男女合十九名 男十二人 女七人 客人廿一人

祈禱 始 山内 終 ヘル教師祝禱

受洗 楠本清子〔喜代子〕

田辺長老教会発足後一年の活動の成果を、A・D・ヘルは次のように要約している。「田辺の教会は一室を持ち、幼稚園を始めるに必要な資金を集めた。しかし、こうした仕事に理解のある日本婦人の信者がいないために、まだ始業に至っていない。年間の受洗者は男子一〇人、女子六人、小児二人、一八八五年末の教会員数二二人、日曜学校生徒三〇人、教会の献金三三ドル六四セント⁽³⁰⁾と。

田辺教会の信徒たちは、借家の会堂ではなく、自らの手で会堂を建設することを協議し、田辺町上片町一〇四番地に土地を求めて着工、一八八六年（明治十九年）一月三日にJ・B・ヘル夫妻を迎えて奉堂式を挙行した。司会と祈禱は山内である。この席で和佐恒也は祝文を寄せている。この会堂建設当時の教会員は、右のヘル⁽³¹⁾の報告にもあるように、僅か二二名にすぎなかったし、もちろん、その中に有力者あるいは財を自由に出来る者もほとんどいなかった。しかし、信徒たちの会堂建築献金は数カ月にして百円をこえたという。またヘルは次のようにも記している。「この寄付の中にはすばらしい婚礼衣裳があった。それは一人の婦人が寄付したもので、その人の夫はキリスト教徒となる前に酒屋として成功し裕福に暮らしていた。しかし、今はキリスト教徒となって酒の商売をやめ、比較的貧しくて寄付するお金がないので、彼女の最大⁽³¹⁾の宝である物を寄付したのである」と。いうまでもなく、この一人の婦人とは山内幹枝のことである。なお、現在の日本基督教団田辺教会は、旧会堂の東側隣接地を買い足し、一九二一年（大正一〇年）に教会兼幼稚園の建物を新築したものである。

すでに示唆したように、田辺教会設立後間もなく、幼稚園創設の試みがあつたが、適当な人材を得られずに延期さ

れていた。この新会堂建築を機に再度幼稚園問題が取り上げられ、一八八七年（明治二〇年）に念願の幼稚園を開設するにいたった。⁽³²⁾ 田辺におけるこの幼稚園創設には山内幹枝の尽力が伝えられており、この体験のちに幹枝をして、佐賀においてそして博多において積極的に幼稚園教育にかかわらせることを結果するのである。

他方、山内暁平は前に明らかにしたように、一八八五年（明治一八年）に組織された田辺長老教会の中心的存在として長老に選ばれ、一月二三日にA・D・ヘルより長老としての按手礼を受けている。⁽³⁴⁾ 『佐賀ルーテル教会教籍簿』に山内の自筆で「明治一七年七月大阪四ツ橋中会ノ議員ニ撰バレテ出席ス」との記述がある。とはいえ、この中会開催は山内受洗直後であり、いまだ山内は長老にも選ばれておらず、また田辺教会も未組織であるゆえに、はたして正規の「議員」を中会に遣る資格を田辺（南部）の集会有していたかどうか不明である。ヘルルの『日本伝道記』にもこの記事は見いだせないことから察すれば、出席したとしても正規の議員ではなかったのではないかと思われる。一八八六年（明治一九年）五月に田辺で開催された第三回定期中会には、たしかに山内は田辺教会の代表（総代）として出席している。この中会で山内は各教会の教勢報告のセクションで司会をつとめている。⁽³⁵⁾ このように、山内の活動舞台はひとり田辺に限定されることなく、早くも大阪と和歌山のカンパウンド長老教会の重鎮として、ヘルル兄弟の信頼も厚く、ひろく活躍をしていたのである。

二、第二期 東京時代

(一)、深川長老教会

田辺長老教会の基礎がおよそかたまったと思われる一八八八年（明治二一年）一月、山内は長老の職を辞して上京するのである。『教会日誌』は次のように記している。

（明治二十年）十二月十七日木曜日

本夜役員改撰セシニ左ノ如シノ長老ノ部ノ十一名山内量平 五点宮本昂ノ右山内量平ハ長老最高点故当撰シ管ナレドモ近々東京表エ越スニ付次点宮本昂ニ譲ルナレドモ宮本承諾セサル故山内量平ノ指名ニテ左ノ如ク改ムノ長老山内量平 宮本昂

（明治二十一年）一月十四日

山内量平東京表エ越ニ付同人宅ニ於テ信者一統留別会ヲ催ス

（同年）一月二十日

山内量平東京エ越ク

（同年）二月十七日

当教会員山内三千代 山内幹枝当地ヲ出立上京ス

このむしろ突然とも思える山内一家の上京が、いかなる事情によるのか、何を目的としているのかは判然としない。山内のその後の動向から推察して、首都東京におけるカンパウンド長老教会の開拓伝道が、その目的の一つであったとも考えられる。あるいは、経済的事情から義弟植村正久の教唆があつてのことであるかもしれない。

さて、上京した山内がまず試みたことは、「カンパウンド長老教会を東京に建てること」⁽³⁶⁾であつた。彼は同じく田

辺から上京した清水某と共に活動をはじめ場所を探し、「一週間以上もの間、余暇を利用して場所を探し歩いた」という。苦勞の末に「場所もよく、かれらの用途に適しており、家賃も手の届く範囲」の家を借りることに成功する。⁽³⁷⁾のちに山内が「二十一年夏東京築地カンパウンド長老教会ヲ設ケ長老トナル」と記しているところから、この場所は築地の一隅であったと思われる。

彼らは早速東京の新聞に広告を折りこみ、大阪あるいは和歌山のカンパウンド長老教会の在京信徒に、その住所を連絡するように呼びかけを行なった。この呼びかけに対し一四、五名の信徒から返信があったという。A・D・ヘールは東京を訪れ、この新設の教会を援助している。さらに教勢を拡張するために、とくに「紀伊出身の人々の親睦の集まり」である「紀伊友愛会」を組織し、キリスト教伝道の一助としたのである。⁽³⁹⁾かかる努力を通して築地の教会は会員の増加を続け、この借家では余りにも手狭まになってきた。そのために、一八八八年（明治二十一年）秋、永代橋近くの元劇場だった家屋を入手、「深川長老教会」と名称を改め移転した。教会の要請にしたがい、長老山内量平は「説教および家庭訪問その他教会の諸事全般を世話する」ために、つまり長老としての牧会に専念することになったのである。⁽⁴⁰⁾

(二) 牧会と出版事業

さらに、上京間もなく山内は東京一致神学校、通称築地神学校（のちの明治学院神学部）に入學、神学の研鑽をつんだことが伝えられている。彼自身、「二十一年築地神学校ニ入ル。二十三年学校ニ出ル傍福音新報発行ヲ助ケ」云々と記している。⁽⁴¹⁾また、比屋根安定がその著「日本近世基督教人物史」の中で、「明治二十五年米国南部ルーテル教会宣教師シラアが来朝し、次いでピリイペリイが来り、東京築地に住んだ。二十六年三月、兩人は明治学院出身の山内量平を伴って、佐賀に赴き、松原町にて復活節礼拝を守った」⁽⁴²⁾（傍点筆者）と述べているからである。

しかしながら、今日、明治学院には当時の山内に関する記録は何一つ残されていない。このことから察すれば、東京一致神学校へはおそらく聴講生として通学したものであろう。あるいは、一八八九年(明治二二年)に築地の一致神学校が、白金の明治学院神学部として移転した後に、この校舎を使用して速成の伝道者養成を目的として設置された、夜間の伝道学校で学んだことも考えられる。しかし、その学生名は僅か一、二名しか判明していないが、その中に山内の名はふくまれていないのである。⁽⁴³⁾

さらにまた、山内は「深川基督教会を創立して其伝道牧会に任じたり」(傍点筆者)とも記されている。⁽⁴⁴⁾しかしながら、この「伝道牧会」とは正規の「牧師」としてというより、むしろ信徒の「長老」としての伝道牧会にあつたというべきであろう。牧師となるには、所定の神学教育をうけた上で准允、按手札をうけなければならぬ。もし、山内が「牧師」であつたとすれば、少なくとも一致神学校または明治学院神学部を卒業、東京第一中会か第二中会に准允志願、ついで按手札志願をなし、その試験を通過したとの、山内に関する記録が残されているはずである。しかし、これらの記録を見いだすこともまったくできないのである。⁽⁴⁵⁾

ところで、カンパランド長老教会は一八八九年(明治二二年)に、日本基督一致教会(日本基督教会)に加入することとなり、東京、大阪、和歌山の各教会はそれぞれの地の中に属することになった。山本秀焯著『日本基督教会史』には、「東京深川教会は明治二三年四月、カンパランド、プレスビテリアン、ミッションより転入し来りしものなり」とあり、⁽⁴⁶⁾さらに、「一致教会最終の議会」である第六回大会(明治二三年)の議員として、東京第二中会に属する「東京深川教会山内長老」と記されている。⁽⁴⁷⁾

これらの諸事実から判断すれば、山内量平は正規の牧師ではなかったが、しかし、信徒の一人そして長老として深川教会の牧会伝道の全責任を担いつつ、日本基督一致教会の東京第二中会に加入する際に、重要な役割を果たしたことがうかがえるのである。ちなみに、義弟植村正久の牧する東京下谷教会もまた同じ東京第二中会所属であり、深川

教会が第二中会に加入するにあつたつての植村の尽力も合わせて想像することができそうである。

山内量平はさらに、植村正久が発刊していた『福音新報』あるいは『日本評論』の編集発行を助けている。「二三年学校ニ出ル傍福音新報発行ヲ助ケテ之ヲ便利ス」と山内自身記している。同時に、彼は故郷にちなんだ名の「南海堂」という印刷出版業をも開業している。『福音新報』は一九一八年（大正七年）十一月一日の山内の逝去を報じた記事で次のように述べている。⁽⁴⁹⁾「同氏は福音新報の創立者の一人にして、又其の頃発行し居たる日本評論の爲にも力を尽し、三四年間其時間と資力を費やされ其の功労多大なるものありき」と。執筆はおそらく植村正久と思われる。『福音新報』の編集発行体験は、のちに山内がルーテル教会に転じてたずさわることになる『路帖教報』『路帖新報』のそれに大きく益することになるのである。また、「活版事業を起し、諸書を出版し、基督教文学を盛んにする志」を有していたといふ山内の南海堂からは、スタウカル著、田中達訳『基督のすがた』、田中達著『亜古士了』⁽⁵⁰⁾（以上明治二四年）、ドラムンド著、福音新報社員訳『安心立命』、ドッツ著、植村正久訳『信仰の基準』⁽⁵¹⁾（以上二五年）、田中達著『教界十傑』⁽⁵²⁾（二六年）と、主として甥の田中達および植村正久の訳著書を出版している。

(三) ルーテル教会宣教師との出会い

深川長老教会の牧会伝道、神学校での勉学、そして印刷出版業という多忙さに加えて、山内は山内家の当主、大黒柱として家計維持の全責任をも負わなければならなかった。量平、幹枝夫妻には子供はなかったが、当時深川の山内家には、量平の母三千代、妹熊子の長女で養女の綾のほか、幹枝の実家川瀬家関係者が同居していた。前にも述べたように、幹枝の兄楠之丞が一八八九年（明治二年）に、さらに妹くのが夫紋作と一人娘松枝を遺して没したために、幹枝の母始代は「紋作氏と共に愛嬢松枝を携へて量平氏を頼みにして東京に上り深川に來り」同居することになったのである。しかし、紋作はほどなく隅田川で水死するという不幸に遭遇する⁽⁵²⁾。

このような構成からなる山内家の家計は、決して恵まれた状況にはなかつたことがうかがわれる。豪放な性格の山内は、家計を預かる幹枝の労苦を横目に、教会、出版事業のために、あるいは田辺におけるように貧しき者のために、次々と出費を重ねていったであろう。この窮状を見かねた植村正久の斡旋であろうと推察されるのであるが、やがて山内は多忙な日々であるにもかかわらず、在京宣教師に日本語を教えることになるのである。今日流に言えばアルバイトである。山内が日本語教師として日本語を教えた宣教師の具体的な名前を明らかにすることはできない。『日本福音ルーテル教会史』によれば、「彼がフェアベック、タムソン等の宣教師と関係をもつたのも、その日本語教師としてであった。彼がシェラーの日本語教師として紹介されたのも、この事情によるのであつて、フェアベックやタムソンの手引だったのである」という。⁽⁵³⁾

一八九二年（明治二五年）二月東京に到着した、米国南部一致ルーテル教会派遣の宣教師シェラーは、右の引用のように、在日の先輩宣教師から有能な日本語教師として山内を紹介されるのである。ここに、山内量平とルーテル教会との親密なそして固い信頼に基礎づけられた結びつきがはじまる。彼はシェラーの、また次に来日するルーテル教会宣教師ピーリーの日本語教師となるだけでなく、よき伝道の協力者ともなるのである。やがて、彼らが日本で最初のルーテル教会の宣教の地として選択した佐賀に共々に赴き、日本福音ルーテル教会誕生にその名を連ねるのである。さらに加えるならば、佐賀のみではなく、博多そして大阪のルーテル教会の創立者として、その歴史にも長く名を刻することにるのである。

（未完）

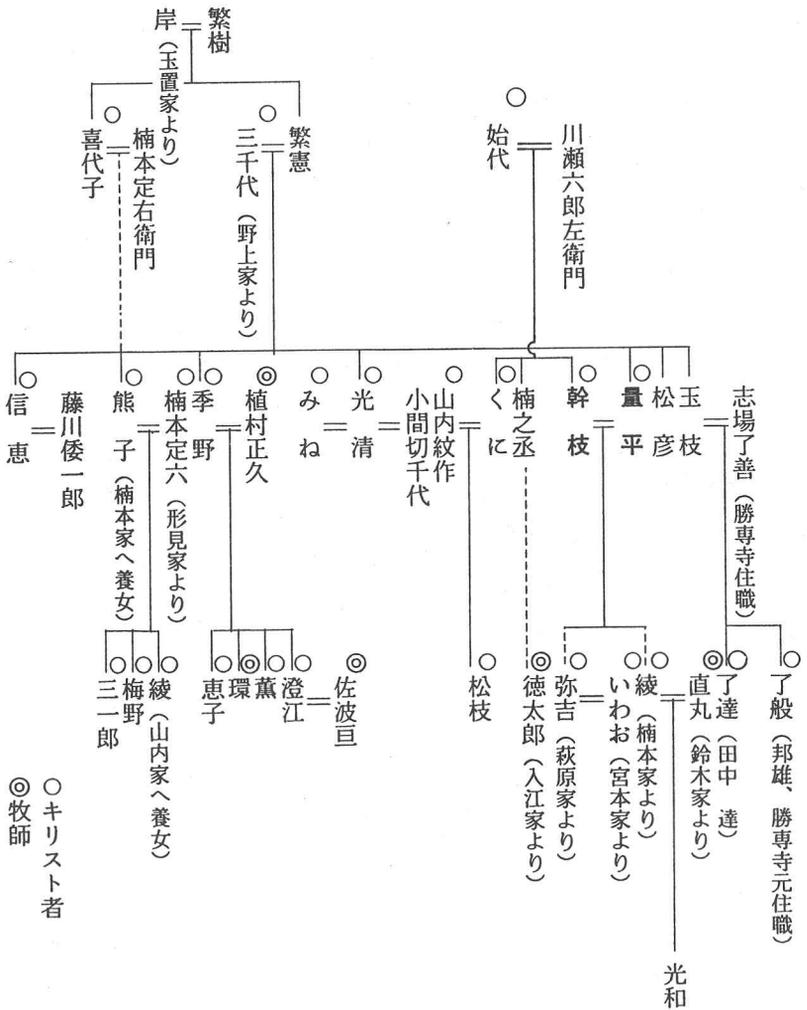
〈注〉

- 1 この山内量平誕生の日付は『田辺基督教会教籍簿』による。ただし、『佐賀ルーテル教会教籍簿』には八月七日と記さ

れている。

- 2 奈良時代から南部川流域一帯は南部郷と称され、平安時代に南部荘となり、熊野別当が支配した。江戸時代には田辺城主安藤氏の下に南部組がおかれ、大庄屋がそれぞれの村を統轄した。一八八九年(明治二年)北道村、山内村など七村を合わせて南部村が成立、一八九七年(明治三〇年)町制をしき南部町と改称、一九五四年(昭和二九年)隣村の岩代村を合併、現在の南部町となる(南部町役場編『みなべ』南部町、一九八六年による)。
- 3 次頁の山内家の家系図は『博多ルーテル教会八〇年史』(一九八九年)に、量平を中心にして作成、記載したもの(二頁)である。
- 4 のちにヘールが「山内さんは酒造家で、大きな酒倉をもち、きれいな住居を持っていた」と述懐している(J・B・ヘール著、新海たか訳『日本伝道記』新教出版社、一九六九年、四七頁)。
- 5 佐波亘編『植村正久夫人季野がこども』(教文館、一九四三年)一八頁。
- 6 田所双五郎編『明治初期の紀南キリスト教史』(日本基督教団田辺教会、一九七四年三五頁。南部町教育委員会編『南部町の文化財』(南部町教育委員会、一九八四年)三三頁。
- 7 楠本悦次編『須賀神社誌』(須賀神社、一九八一年)三一頁。
- 8 日本福音路帖教会創立貳拾年記念会編『日本福音路帖教会史』(日本福音路帖教会、一九一四年)一四頁。
- 9 『るうてる』第七二号(一九一七年六月一五日)。
- 10 『日本福音路帖教会史』一四頁。
- 11 『日本福音路帖教会史』一四頁。
- 12 一九〇五年(明治三八年)八月に佐賀で死去した川瀬始代の告別式で、山内が朗読したと推察される山内自筆の「式辞草稿」(杉崎家蔵)による。
- 13 『るうてる新報』(一九一〇年八月一日)。

山内家家系図



14 この事件の原因の一つともなったという次のような逸話が、のちに仏僧からキリスト者となり、やがて友人山内の招きに応じて、ルーテル教会牧師となった和佐恒也の話として伝えられている。

——南部の酒造家松屋には、お上を嵩にきた小役人、警吏、税吏らが毎日のように酒を所望して立ち寄っていた。剛腹尊大な山内はそれに耐えかねて一計を策した。小便を満たし化粧した薦樽を、最も目につき易い店の正面にすえたのである。ある日、また小役人が来て、案の定、目ざとく、その薦樽を見つけた。「あれは何か」「小便でございます」「極上の酒であろう」「いや、小便でございます」と押し問答の末、山内は「それでは」とくだんの樽から小便を枿になみなみと注いで渡した。焦らされていたこの小役人、「ゴクリ」と飲むや吐き出した。それ以降、松屋に対する役人の風当たりはとみに強くなったという。——

この逸話は和佐より受洗の山内六郎牧師から筆者が聞いた話である。

15 『日本福音路帖教会史』一五—一六頁。

16 『植村正久夫人季野がことども』三二頁以下。

17 植村正久が季野に宛てた書簡のいくつかを紹介しておこう。

御一族 方々ハ近日ニ至リ奉教上ノ形況如何 祈望ノ念ニ堪エズ 殊ニ御母公ノ如キハ最モ心頭ニ懸リ候(植村正久全集)第八巻、植村正久全集刊行会、一九三四年、一一九頁)。

預ネテ御企図ノコトニテ候得バ定メテ親族ノ人々ニ福音ヲ御伝ヘアリシナル可シ 其結局如何ナルサマニテ候ヤ 元来耶穌モ預言者其故里ニ尊マレズナド仰セオカセタマヒシ程ニテ親戚ノ輩ニ悔改帰ヲ慾ムルコトハ容易ナルガ如クニテ亦甚難キモノニテ候 小生モ屢是ニハ辟易致シ候故君ガ苦心左コソト察シ入候 神ノ栄ト救主ノ愛トヲ顕彰シ人類永遠ノ苦罰ヲ拯ハント欲スルノ赤心アルニ於テハ至陝ナル人心モ怖ルルニ足ラズ ヨク勉メタマヘ(同一四四頁)。

令妹タチハ頗ル敬虔ノ路ニ進歩致サレ候由真ニ愉快ノ至ニ御座候 拙者ガ其信仰ヲ喜ブコトト親愛ノ懇情トヲ之ニ致声シタマヘ サレド御母公ハ未ダ救主ヲ信認スルノ好果ヲ結ビニ至ラザル旨誠トニ御心痛左コソト存候 然シ是トテモ

必定信仰ヲ起スノ時節モアル可キナレバ只管天祐ヲ求ムルニ如カズ

君ガ仲兄ハ教書類ヲ研究致サルル趣神ノ啓導ニ由リ教主ヲ認ムルニ至ランコトヲ望ム 同君ハ近來何等ノコトニ努力セラルルヤ拙者ハ早く尊堂始メ君ガ兄妹諸子ニ面晤致シ度存ズルナリ (同一四七頁)。

日頃君ノ切ニ冀望セラルル御家族ガ信仰ノ有様ハ近頃奈何御心中左コソト推察致サレ候故アハレ彼ノ人々ニ面会ノ上教義ヲ談ジ君ニ応援ヲ為サバヤトハ思ヘドモ山河遼絶シテ其ノ由ナキヲ如何ニセン 只祈祷ヲ以テ聊カ此ノ心ヲ遣ルノミ 会々君ガ涙ヲ以テ播カルル福音ノ種ハ他日上天ノ灌溉培養ニ由リ笑ヲ以テ其実ヲ収ムル時ノ有ル可キナリ 天豈吾人ノ善業ヲ徒勞ニ属セシメンヤ 神ヲ信ジテ益々努力セヨ 近日中二三ノ教書ヲ送ル可ケレバ例ノ如ク人々ニ読マセ候ヘ (佐波亘編著『植村正久とその時代』教文館、一九三七年、第一卷、七五九頁)。

18 『日本伝道記』四七頁以下、とくに五二―五三頁。

19 『日本伝道記』九七―九八頁。

20 『日本福音路帖教会史』一七一―一九頁。

21 警醒社編『信仰三十年基督者列伝』(警醒社、一九二二年)三〇八―三〇九頁。

22 『日本伝道記』一〇四頁。

23 『植村正久夫人季野がこども』二三頁。

24 志場了般はその後煩悶苦悩の末に寺を捨て、一八八八年(明治二年)東京に移り、伝道者たらんと明治学院神学部に入學するが、在學中に病死した。了達(田中達)もまた明治学院に進み、教文館に勤務して種々の著作、翻訳に従事、米國留學後東京神學社の教授となった(『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、八四七頁)。彼の著訳書のいくつかは、山内の南海堂から出版されている。

25 『日本伝道記』一四三頁。『佐賀ルーテル教会教籍簿』には、山内自身の筆で「明治一八年一月田辺ニ出テ自費伝道ヲ試ミ」と記されている。

- 26 『植村正久夫人季野がことども』八九頁。
- 27 『日本伝道記』一三〇頁。
- 28 『日本伝道記』一〇五、一三二頁。
- 29 『明治初期の紀南キリスト教』八〇頁。
- 30 『日本伝道記』一三二頁。
- 31 『日本伝道記』一四三頁。
- 32 『日本伝道記』一五七頁。
- 33 『るうてる』（一九一四年六月一五日）に「(山内幹枝姉は) 去る明治拾八年即ち今を去る参拾年前和歌山県田辺教会所属の教友の家庭に三四の幼児ありしが其頃は基督教當時の如く盛ならず動もすれば社会は基督教徒を蛇蝎視して隨て其子女の如きも他の子供仲間より排斥されしかば之を見るに忍びず、幼稚園を設置せば我教徒の子女を慰むるに便なるべし」として同志相謀り大阪市より竹谷小末女を聘して会堂を保育室に当て一幼稚園設け自ら竹谷氏の助手としていそしめし」とある。
- 34 明治一八年度『田辺基督教教会日誌』による。
- 35 明治一九年度『田辺基督教教会日誌』中会記録による。
- 36 『日本伝道記』一六七頁。
- 37 『日本伝道記』一六七頁。
- 38 『佐賀ルーテル教会教籍簿』。
- 39 『日本伝道記』一六九頁。
- 40 『日本伝道記』一六九頁。
- 41 『佐賀ルーテル教会教籍簿』。

- 42 比屋根安定著『日本近世基督教人物史』（基督教思想叢書刊行会、一九三五年）四〇八頁。
- 43 明治学院史料室の秋山繁雄氏のご教示による。詳さに古い史料を調べてくださった秋山氏に感謝の意を表したい。
- 44 『信仰三十年基督者列伝』三〇九頁。
- 45 注43に同じく秋山氏による。
- 46 山本秀煌著『日本基督教会史』（日本基督教会事務所、一九二九年、復刻版、一九七三年）九六一―九七頁。
- 47 『日本基督教会史』一〇八頁。
- 48 『佐賀ルーテル教会教籍簿』。
- 49 『福音新報』第二四卷一二二二号（一九一八年一月二日）。
- 50 『福音新報』第二四卷一二二二号。
- 51 アジア文化研究委員会編『日本キリスト教文献目録・明治期』（国際キリスト教大学、一九六五年）より南海堂出版物を取り出した。
- 52 川瀬始代告別式「式辞草稿」（注12参照のこと）。
- 53 福山猛編『日本福音ルーテル教会史』（日本福音ルーテル教会、一九五四年）二五頁。

〈座談会〉

教会建築の歴史と現代 (その一)

出席者

徳善 義和 (日本ルーテル神学大学教授/司会)

前田 貞一 (池袋教会牧師)

江口 再起 (藤が丘教会牧師)

河野 通祐 (建築家・武蔵野教会会員)

菅野 義隆 (建築家・大岡山教会会員)

西村 晴道 (建築家・ひかり教会会員)

徳善 日本福音ルーテル教会は、一九九三年で一〇〇年を迎えます。九州の佐賀で一八九三年四月二日、イースターの礼拝を守ったのが最初の礼拝でした。そこでこの一〇〇年の総括をしなければなりません、この総括が次の一〇〇年の歩みに結びついていかなければなりません。きょうは日本福音ルーテル教会の教会建築の一〇〇年ということで座談会を開くことにいたしました。建築家であり、私たちの教会の会員であ

り、かつ近年、実際に教会の建築設計に関わってこられた経験をお持ちの皆さんに集まっていたいただきました。まず自己紹介をかねて少しずつどうぞ…。

●ルター主義と土着性

河野 戦後できた木造建築の武蔵野教会も三〇年たちました。手狭にもなったし、そろそろ改築を考えたいということ、まず基本線でも引いておこうということになりました。そこで、ルターの礼拝観をよく考えてみました。ルターは教会堂についてどのように考えていたか、少し調べてみました、あまりないのです。むしろ大事なのは、土着性、つまり「会衆と共に」というルターの礼拝の思想ではないかと思うようになりました。そこで教会建築でも、この土着性をどのように考えるかが一つの課題となります。幾つかの問題がでてきました。たとえば祭壇か聖卓か、人から神への捧げ物か、神から人への賜物か。ルターの場合、後者でしょう。また、神のこぼを伝えることが大切ですが、その説教壇と会衆の関係、聖歌隊席の位置、あるいは洗礼盤の場所などですが、昔は洗礼盤は教会の入口の所にありました。しかしルターは会衆と共にということで、洗礼盤を会衆の面前にもつてきたのです。ところで、私は最初、羽村教会を設計しましたが、

その時はルターのことをあまり知らず、キリスト教を日本にどう土着させるのかという視点で設計しました。極端に言えば、砂漠の中に生まれたキリスト教と、森林地帯に生まれた日本の仏教。その中でキリスト教の土着を考えるわけです。

羽村は青梅に近いので、青梅丸太の組み合わせを使ってみました。武蔵野教会のときは地域的建物という視点で考えました。地域に密着した建物ということで、材木は定尺物を使い、柱の間隔を九尺間にしました。湿度が多いので、木の呼吸ということなど、日本の気候も考えました。最近できた京都教会のときには基本設計のお手伝いをしました。教会建築は一遍に仕上げてしまうのではなく、長年にわたって造っていくもの、会員が参加しつつ、お金を出し合って造っていくものです。つまり「未完成の完成」ですね。また土着性ということも、近代建築の中で土着性を追求すべきです。昔のままではだめだ、と言つて機能性がかりでもだめです。日本ルーテル神学大学の設計の際に助言したアメリカの教会建築の権威ソビック博士は、土着性ということで桂離宮をほめていますが、それには異論があります。桂離宮は権力側の建物でしょう。会衆と共にある教会堂はちがう。二〇年ほど前、ヨーロッパで開かれた教会建築のための会議では、教会堂は世俗建築ではだめで、新ゴシックが主張されましたが、ゴシックでない

新しいものが生まれてもよいと思うのです。また一般的に言つて、建築家があまり采配をふるいすぎではよくないのであって、むしろ会衆のまとめ役だと思えます。建築家まかせでは困るのです。建築家の前川国夫は、建築の良し悪しは、オーナーとの接触の頻度によると言っていました。徳善 その意味では、オーナーたる教会側に、教会建築へのしっかりした見識がないとだめですね。

菅野 一九八三年に横須賀教会を設計し、現在、藤が丘教会が建設進行中ですが、私の方針としては、できる限り会員のかたがたと多くの接触を持つようになっています。まず、会員がどういふ教会生活をその教会で送るのかを考える。すると礼拝堂部分をどうするかが一番問題です。しかも、すでに教会生活を送っている会員の使いやすさばかりでなく、新来者も入りやすい建物でなければなりません。つまり伝道面です。その上、教会の中の空間は、日常性とはちがう厳肅なものがある必要もあり、また光、通風、音響という周囲の環境との関わりも大切です。フィンランドに旅行したときに見学した教会の一つに、森の中にある教会がありました。教会の中からガラスを通して森の自然がよく見え、すばらしいものがありました。しかし日本で教会を設計する場合、いろいろ苦労もあります。まず第一に土地の狭さ、財務上の問題、礼拝堂を一

階にするか二階にするか、二階の部分にもつていけば礼拝空間として採光など考えやすいのですが、しかしまた他方、老人や身障者には不便なものとなる……。

西村 私は東海ルーテルの流れの中で育ちました。東海ルーテル系の建物は多くがもう三〇年を過ぎました。だいたい一つのパターンで造られており、勝呂組が造っています。私自身はひかり教会の設計に関わりました。神学的にみて暗中模索でしたが、教会を建てる場合、独得の難しさがあります。

本教会の方針、教区の方針、当該教会の方針、これらが必ずしも安定していない場合があります。やはり日本福音ルーテル教会なりのしつかりした教会建築の理念なり基準書が必要ですね。私はソビック設計事務所に留学して学びましたが、ソビック博士は教会堂として茶室のイメージを持っておられ、また伊勢神宮のアプローチにも注目していました。また教会堂の中では、洗礼盤、説教壇、それに聖卓が最も大事だと強調していました。ただ私は、このソビック思想には納骨堂の問題がでてこないと感じていますが……。

● トーラクソン・タイプ

徳善 お聞きしていると、まさに建築学と神学との学際的な研究作業の必要を痛感しますね。日本のルーテル教会では、

こうした問題について意見が言えるのは青山四郎先生ぐらいしかいなかったですね。それにしても日本の教会一〇〇年を考えると、アメリカの教会との関連が強い。教会建築についてもしかりです。アメリカのルーテル教会から日本のルーテル教会は何を引き継いだのか。正しく継承したか、あるいはアメリカの教会堂のミニチュアを造っただけか。こうした流れの中で一つの伝統となつていったのは、宣教師のトーラクソンが指導して建築した教会ですね。設計をヴォーリスがおこない、施工は辻組が請負いました。久留米教会―旧神戸東教会―旧京都教会―旧神学校チャペルの線です。

前田 西村さんがおっしゃった東海ルーテル系の諸教会も、あれは東海系独自のものでなく、やはり基本はヴォーリスの設計で、施工を後に勝呂組がしたのでですね。

徳善 いずれにせよヴォーリス設計・辻組施工のトーラクソン・タイプが、日本のルーテル教会の建物の一つの型ですね。木目を黒く塗りますから色調は暗い。戦後は土着思想との関わりで木目をそのままにして明るくなりましたが……。

前田 オーガスタナ系の諸教会の場合も、やはり一つの方法があり、いわば「仮会堂の思想」でしたね。

● 聖なる空間――茶室か、いろりばたか？

河野 ところで聖壇のところにレール状の柵があり、その前で聖餐を受ける教会もありますが、あれは正式には何でしょうか。

前田 あれは単なる柵ではなく、厳密に言えば聖卓の変形なのです。だからそこで聖餐をいただく。しかし日本では礼拝における動作、立つとか、座るとか、ひざまずくといった動作が、極めて恣意的になされ、決まっていない。日本の教会の礼拝観が成熟していないわけです。ですから、ああしたレール状の聖卓も位置づけられない。

徳善 あれはドイツでは見たことがないですね。しかし北欧にはあるし、アメリカにもある。

前田 北欧には、ローマからの直接の影響が残っている場合があるのです。あのレール状聖卓の前では、パンとブドウ酒は手渡しでなく、口を開いて入れてもらう。だからあのレールの前ではひざまずく必要があるわけです。しかし日本の教会では、そうした背景が未整理のまま、いろいろな事を行なっているのです。きちんとした礼拝の神学が必要です。

河野 最近、会堂の中の椅子は長椅子でないほうがよいと聞きますが、どうでしょうか。

西村 ソビック博士は、長椅子でなく、バラバラの個々の椅子のほうが良いと言っています。いろいろな形をかえて使えま

すからね。

徳善 そのソビック氏のことですが、彼は桂離宮と茶室だと言う。しかし私は茶室でなく、いろりばただと思う。神の家族が集まるいろりばた、それが礼拝堂だと思う。そして、いろりの周りは様々に応用がきく。そうした点からみて、可動の個々の椅子のほうがよいというのも納得できます。

前田 しかし、はたして礼拝堂の空間において、いろりばたは可能だろうか。フィンランドでは近年、礼拝堂とは別集会所をつくっています。つまり礼拝堂と、人々が集まる集会所とは、別々に必要ではないだろうか。

徳善 いやいや、私が言う「礼拝堂Ⅱいろりばた」論は、たんに礼拝堂を集会所と兼用するというようなことではない。そうではなくて、神の家族が集まるとき、いろりばたが持っていた意味を、礼拝というものが具体的に持つのではないか、つまり、礼拝堂イメージとして、茶室でなく、いろりばただと思ふのです。

西村 ソビック博士のいう茶室イメージとは、一見すると何でもないただの空間が、いったん人が入るとそこで役が決まる。すると、そこに一つの聖なる空間が現われるというものです。

江口 いずれにもせよ、この話の流れの中にでてきた二つの

要素、つまり、神と真向かう「聖なる礼拝空間」と、人と人とがあい集まる「交わりの空間」、この二つが、現代の教会建築の大きな眼目ではないでしょうか。実際、いま私は藤が丘教会の会堂建築に関わっていますが、この場合も結局は、この二つの大きな要素によって構成されているわけです。それから、付け加えればもう一つ、日本の教会は伝道型教会であるほかないわけですから、外観から見ての「教会らしさ」も重要です。

前田 それはつまり、教会とは、すでにいる会員だけのものではなく、社会の中での存在でもあるということ、人々がそこを聖なる空間として感じられるということが大事なのです。そこから伝道も始まります。だから教会は、外観からしてすぐ教会とわかる建物でないと困る。ただのビルでは困るわけです。

河野 今は、十字架があるので、やっと教会だとわかる教会堂も多いですね。しかも、その十字架も小さくて目立たない。**徳善** 韓国に行くくと、教会の十字架が非常に大きい。教会が社会の中で大きく自己主張をしている。これは今日の韓国におけるキリスト教ブームと無縁ではないはずです。日本でも戦前は、ちよつと高い建物は教会で、その屋根の上には十字架が立っていて、すぐわかりました。

西村 最近のアメリカでは、十字架はタテヨコの長さが同じプラス型ですね。ヨコよりタテの長いいわゆる十字架では処刑の十字架を連想させるのでよくないらしいのです。

徳善 しかし、キリストの十字架は、そもそも処刑のための十字架ですよ。

河野 日本の場合、土地事情もあり、なかなか教会の自己主張もむずかしい。

前田 教会はいろいろばたの「交わりの空間」か、「聖なる空間」かについてですが、いろいろばた的要素が強くなると聖なる空間が制限を受ける。むしろ「聖なる空間の中で起こる交わり」こそが必要ではないでしょうか。宗教改革以前のカトリックの教会は、いわば会衆不在の教会でした。しかし今、プロテスタントの教会が逆に神不在の教会になってはいないか。つまりある面から言えば、カトリック教会には伝統的な聖なる空間の感覚が今でも生きつづけている。それに対しプロテスタントはどうだろうか。

江口 その場合、大事なことは、カトリックにおける「聖なる空間」と、プロテスタントなりの「聖なる空間」のあり方の違いという点ではないでしょうか。それぞれの空間を支える背後にある神学の違いという点まで考えてみなくてはならないと思うのです。

西村 実際、カトリックとプロテスタントではどう違うのですか。

江口 極めて簡単に言えば、カトリックの場合、教会堂という建物そのものが「聖なるもの」なのです。カトリックの教会法でも、教会とは「聖なる建造物」という具合に定義されています。つまりカトリックの場合、聖なるものがそこにある。それに対してプロテスタントの場合、そうしたあるものが動いていないといけません。そこにただあるだけではいけない。つまり、そこで見こばが語られ、礼拝がなされているというふうに動きがある時、いわば聖なるものが生起すると言えるわけです。

徳善 それはまさにコムニオ・サンクトルウム、すなわち教会とは「聖徒の交わり」であるというルターの教会観を解釈していく中で教会建築を考えることが必要だということですね。つまり、聖なる物と関わる共同体か(カトリック)、それとも聖なる者たちの共同体か(プロテスタント)。この違いが大事なわけですね。

江口 しかもまた、たんに聖なる者(人)たちの共同体と言っても、その人たちの思いで、みんなデモクラティックに考え合い集まったからと言って、それで空間が成立するわけではないでしょう。中心が必要で、その中心によってこそ初

めて「聖なる空間」が出現する。もちろん、その中心とはプロテスタントの場合、「神のことば」ですね。

前田 結局、ルターが批判したのも、聖なる空間の中でみこばが語られていない、サクラメントが行なわれていないと言つて当時のカトリックを批判したわけですね。たんに説教やサクラメントの機能だけを強調したのではなく、むしろ説教が軽視されていることによって、聖なる空間が生じていないことを批判したと言えますね。

菅野 聖なる空間ということを考えてみますと、それはやはり非日常的なものであり、イメージ的にはやや暗い、やや寒いという感じします。ところがルーテル教会の場合、やはり説教が中心となる。すると会衆の側から言えば、説教はよく聞かえてほしい。また聖書を読むには一定の明るさも必要となります。しかし、こうした日常的な快適さは、いわゆる聖なる空間が目指しているものとは違っている気もします。どうもこの辺がむずかしいと思うのです。

前田 いや、ルターが説教を強調したのは、当時のカトリックがミサを前提としてなされるべき説教、その説教が軽視されていることを批判したのです。ですから、やはり説教の前提には、きちんとしたミサ礼拝がある。つまり説教と聖なる空間は矛盾しないはずですね。ところが、ややもすると今日の

プロテスタント教会は、説教さえ強調されれば、その前提となつてゐる礼拝はあまり考えなくてもよいという傾向も一部にあるわけです。しかし、それはやはり間違つてゐると思ひますね。説教壇のみではだめで、聖卓もどうしても必要です。しかもその聖卓も、カトリック的にただ犠牲壇として、つまり祭壇としてでなく、その聖卓をルターは会衆の前面に持ち出しました。そうすることによつて礼拝が信者一人一人のものとなつていくのですね。

河野 まさにそういう意味で、聖なる空間の問題は、キリスト者一人一人の信仰に深く関わつており、信仰とは無関係に何か聖なる感覚があるわけではない。だから私は、ルーテル教会の教会建築の設計は、やはりルター派の建築家がするべきだと思つてゐます。信仰から教会建築へ、となる。したがつて、われわれもまず建築家である前に、まず信仰者でなければならぬと思つてゐます。

●カテドラル型とコミュニティ型

前田 ところで建物には消耗建造物と、教会のようないわば恒久的な建造物がある。しかし、いくら恒久的と言っても、財務上の問題があります。現在の建物は、だいたい四〇年もてばよいというふう聞いていますが……。

河野 それには「未完成の完成」ということも関わつてきます。教会を設計する建築家としては、予算がこれだけだから、仕方がないのでここまでしかできないと言つては失格です。むしろ、これだけの予算があるから、それをどう使うかと考えるべきです。まず基本をしつかりと押さえて……。

前田 しかし、使う側の教会には、あれこれ注文が多いというのが現実でしょう。なかなか基本をしつかりと、とはいかない。本当は第一段階、第二段階という具合に建設を進めるべきでしょうが……。

菅野 財務の面を含めてあまり安易に考えると、聖なる空間とかでなくて、もう場所さえあればよいという具合にもなつてしまう。石造りや堅牢なコンクリートでなく、木造で手つとり早くとなつてしまふでしょう。

河野 いや、むしろ木造でも丁寧な造ればそのほうが良いのではないのでしょうか。今はコンクリートの質がひどく低下しており、鉄筋コンクリートの商業建築も六〇年もたないでしょう。

西村 しかし都市計画という観点から言つて、建物のサイクルが早くなつてゐます。周りの条件がほとんど変化するわけですから、建物としては二〇年サイクルくらいではないでしょうか。

河野 しかし教会建築の場合、それでは困るのではありませんか。

西村 そうは言っても、今日の社会状況の中で、教会だけ別というふうにもいかないし……。

河野 そこで教会を建設する場合でも、採算を考えて計画を立てるということ、たとえば貸ビル、貸ホール付きの教会ができる。教会が商売をする。しかし教会の姿勢としてそれによいのでしょうか。それからもう一つ、教会の規模、大きさという問題があります。つまり日本の教会の場合、それはコミュニティ教会（地域教会）なのか、それともカテドラル教会（中央教会）なのか。そもそも日本のルーテル教会には、そういう考え方はあるのでしょうか。

徳善 実際は小さな教会として存在していても、自己イメージとしてはカテドラル型となっている。設計もそうなるでしょう。本当はコミュニティ教会を造るべきでしょう。

河野 先日、ユダヤ教の会堂（シナゴーク）に行ったら、椅子に全部、個人のネームが入っていました。自分の席が決っている。あれはまさにコミュニティ型です。

菅野 今は人口の流動がたいへん激しく、歩いて自分の教会に行ける人が少なくなりました。そこでたとえば中心になるカテドラル教会が中央にあつて、その他は地域地域でコミュニ

ニティ教会としてつながっていく……、そういう考え方もあつてよいのではないのでしょうか。

河野 たとえば東京教会をカテドラル教会として、その会堂建設のためには、全国で献金するとか……。

江口 そういう考え方もありますが、しかしそれは今の日本福音ルーテル教会の教会制度を全面的に変更した場合に可能になる。つまり、カテドラル型—コミュニティ型という、中央教会が全体に一つあつて他はその枝としての地域教会というあり方を、今のルーテル教会は教会制度としてとつていません。本教会という見えざる全体教会に包括された形で個々の教会が各地域でコミュニティ教会として存立しているのですから、カテドラル教会かコミュニティ教会かは、教会建築の問題というより、教会制度の問題ですね。

● 交わりの空間——教会の内と外

河野 ところで教会を考える場合、もう一つ信仰教育という教育の問題がありますね。その意味では教会学校の役割なども大切で、そのためにも礼拝堂とは別に部屋が必要です。しかし、敷地も狭くなかなか十分にはいきませんね。昔のヨーロッパの教会などには、よく中庭があつて、ちよつとした集いなど中庭でできたわけです。日本の場合、お寺がそうで

すね。本堂の前に広い庭がある。庭があるので本堂に入るにも道路からいきなり入るのではなくて、ワンクッションがある。横のほうから入ったりして……。これは非常に日本人にはよいですね。門をくぐって、実際、玄関に入るまでちょっと距離がある。

前田 ヨーロッパのカテドラルなども、やはり前は広場になっていきますね。

徳善 その広場で、夏の催し物などが、教会の前でいろいろ行なわれていますね。

前田 日本の場合、なかなかそうはいかない。とても広場で野外礼拝などできない。だから縮こまって、悪い意味で、教会がいろいろばたいた狭い交わりだけの場になっている。

江口 まさにそこが問題ですね。聖なる礼拝の空間は確保したいし、その上で、交わりの空間も必要です。この両者を、しかも狭い敷地で実現しようとする。ここが今日の日本の教会建築の工夫のしどころですね。もつとも、応々にして両者とも中途半端になっていますが……。

西村 アメリカの教会の場合、近年、礼拝堂と、立ってコーヒーが飲めるいわゆるコンコース・ロビーとを完全に分けて、両方とも必ず造るようですね。

徳善 日本キリスト教団の、鎌倉雪の下教会などもそうです

ね。広く言えば、たとえば伊勢神宮のアプローチなども同じ構想でしょう。礼拝堂へと通じていくアプローチが、聖なる空間に対して、どういう機能を果たしているか、たいへん興味深い問題ですね。

西村 日本の場合、コンコース・ロビーがあまり広いと、そこを仕切って、もう一つ部屋を造れという意見がすぐ出てきますね。私は、ガラスの素通しにする工夫などをしています……。

徳善 武蔵野教会などは、狭いのですが、玄関部分が、いわば交わりの空間となっています。

前田 玄関というのは、半分内側で、半分外の延長でないといけませんね。開放感がなければいけない。

西村 アメリカでは、コンコース・ロビーには、絶対、椅子を置かないですね。

徳善 そう、椅子がないことが、一つのポイントですね。椅子のないことが、逆に人々をそこにとどまらせる。

江口 初めて教会に来た人にとっては、そこに椅子のないことが決定的に大事ですね。椅子があると束縛される感じになるらしい。しかし、教会員の常連は椅子にすわってゆつくり話をした。だから、ある所にはちよつと椅子もあつて、他の所は全く自由に動けるといふ工夫が必要ですね。

前田 しかしまた、日本の場合には、ある程度、内と外とのはっきりした区別も必要なのです。あまりオープンだと、かえってまずい。日本の場合、教会に来ることは、やはり一つの決断が前提となっているわけですよ。ですから、あまり開かれすぎていると、また逆に心理的に入りづらい。やや、ななめから入れるような玄関がいいのかもしれない。

徳善 質屋の場合もそうですね。正面には大きな門があるけれども、実際の出入りは横のほうの小さなくぐり戸を使っている。

河野 ヨーロッパの建物の場合、廊下というのは、あれは外なのです。ところが日本では廊下も内で、その家全体が道路、つまり外に面していますから、アプローチにはよけい工夫が必要ですね。

徳善 日本の場合、桂離宮でも、真正面からアプローチをしない。ややななめからアプローチして、そしてスーツと入る……。

西村 ところが、最近、喫茶店などはガラスばりが多くなつた。あれは中が見えないと人が入らないからです。特に若い人の場合、オープンな感じがないと入らない。もともと、喫茶店がオープンであることと、開かれた教会というのでは意味がちがいますが……。

前田 喫茶店は交わりの場ですね。しかし、教会はまず第一に聖なる礼拝空間であり、そして交わりの場所なのです。実際、外から透けて見えるガラスばりの中で人は祈ることができるところか。教会は礼拝と交わりの二つの機能を満たすことがどうしても必要です。

菅野 フィンランドには、先ほども言いましたように、自然の中でしたがガラスばりの非常にオープンな、しかも本当に聖なる空間といった教会がありました。

前田 日本ではガラスばりだと、隣りの洗濯物が見えてしまう。

河野 武蔵野教会の場合、窓の位置を高くしてあります。あれは外の物音が聞こえないように、という配慮でもあります。が、防音に関しては聖壇の位置などでも工夫できますね。よく昔から、聖壇の位置は東と言われていますが、それは場合によるのでしょうか。

前田 聖壇の位置が東というのは、あれはエルサレムの方向ということですね。ですから日本の場合は逆に西になる。これは場合場合でしょう。

●今後のために

徳善 さて時間もなくなってきましたが、最後に、建築家と

して教会に望むことは何でしょうか。

河野 まずルーテル教会としての「礼拝の神学」をきちんと確立してほしいですね。そして、その神学に基づいて建築家にきちんと注文をしてほしいですね。

徳善 日本福音ルーテル教会全体として、教会建築の基本となる理念が必要だということですね。

西村 建物というのは人が造るものですが、ある場合には建物が人を規定する、あるいは束縛して人間疎外が起こることもある。また日本の場合には、建築家と言っても教会建築はほとんど手がける機会がないですから、基本的なアドバイスがどうしても必要ですね。

前田 実際は、教会員の建築家が設計する場合もあり、またそうでない場合もあるわけですから、教会全体の中に教会建築のアドバイザー・グループが必要だと思います。

河野 具体的に委員会を組織したらどうでしょうか。

徳善 実際に教会堂を建てる時には、私は、教会側が設計者に注文する場合、それは「言葉」によってするべきだと思います。素人はすぐイメージによる図面を書いたりしますが、言葉(理念)を具体化して図面を引くのは、これは専門の建築家の仕事です。しかし、そうであるから余計、教会側としては、明確な教会建築への理念と、原則的な基準を持つ

ていなければなりません。日本の風土に合った、そしてルター派としての神学に基づいた建築理念、また現代の教会として必要なことや伝道の教会という課題、こうした事柄を考え、原則的なテーゼ作りをすることが本当に必要なだと思います。どうも長時間、ありがとうございました。

(一九八八年七月二日、ルーテル市ヶ谷センターにて)



〈エッセイ〉

初めに言があった

——ELC宣教師到着第二陣のかたがたを中心にして

西 恵 三

標題に聖書の中でもないへん有名なヨハネによる福音書一章一を選んでみたが、もちろん神学や哲学的な勉強や研究の背景が皆無である私のことゆえ、これに関する研究発表をするつもりはない。日本における宣教という希望を胸に描いて来日された宣教師のかたがたが、日本国内で、日常的な生活を円滑に送るにも、主目的である福音を宣べ伝えることを充分に実行するにも、日本語を満足に理解でき、自由に駆使することが望ましいことは言うまでもない。初期の頃の宣教師のかたがたが、どのようにしてこの困難を克服されたのかを記録しておきたいのである。

当時は第二次世界大戦が終わって、いわゆる占領軍の進駐によって日本はマッカーサー將軍の支配下にあり、打ち

続く種々の占領政策の早急な施行のもとで英語(米語)を使用する必要が急増しつつあった。したがって来日された宣教師のかたがたも、いざとなれば日常生活に最低限必要な事柄は、進駐軍あるいは軍属として同行されたチャブレン(隊付牧師)の援助を受けることは可能であったと想像される。実際、進駐軍には日本人の中から英語のできる人——特に会話を自由にされる人々——が通訳としてきわめて有効的に利用されていた。その頃までに日本の学校教育に採用されていた英語の授業は、読み(reading)と作文(composition)と文法(grammar)を主とするものであり、教える先生がたも海外での生活を経験された人は今にくらべて極めて少なく、特に米国流の発音や会話などの方面の授業はたいへん貧弱で、外国人(特にアメリカ人)と自由に米語で話すことのできる人は極めて少人数に限られていた。

前号記載の第一陣に続いて第二陣のかたがたが到着したのは一九五〇年(昭和二五年)九月五日夜で、横浜港に上陸した。彼らはP・ハイランド師とその家族、G・タング師とその家族、K・ステンバーク師(このかたは約一年後に来日された婦人宣教師C・モズビー姉と結婚)、婦人宣教師D・オフステダル姉、L・ピーダーセン姉、A・M・ミ

ツチエル姉の三人。九月二日にはL・ジョンズルド師とその家族が到着した。初期の宣教師のかたがたは、日本伝道の計画の立案から実行までの時間的な制限のためか、アメリカで日本語の勉強もしくは日本に関する知識の収集等に充分準備する余裕がなかったせい、そのような事柄はほとんど日本到着後に開始されたという印象が強かった。

このような状況下で日本語の学習は特に緊急を要したわけで、同様な事情にあつた他のキリスト教諸派の宣教師のかたがたと協力して何とか工夫をして作られた日本語学校——Naganuma School (長沼校)——に通学されていたようであつた。けれども彼らには宣教のための計画が直ちに種々の形で同時進行していたらしく、日本語の習得専用の期間を充分長く持つ余裕がなく、長沼校での時間割ではその活動のためのスケジュールに必ずしもよくそぐわないこともあり、自分たちで日本語学校を作つてできるだけ短期間に日本語の学習を有効的に終了したいと考えたらしい。このような発想は前回紹介したジュディ・ハイランド夫人著の『In the Shadow of the rising Sun』(邦訳『旭日の影で』聖文舎)の中で希望と興奮に満ちて中国伝道のためにアメリカを出発し、途中フィリピンで待機中に少しでも自分たちで中国語を勉強しようと努力した紹介文

“There we opened a school of Chinese language-10 eager students, but no books and no teachers.”の中にその萌芽を見ることが出来る。こうして到着第二陣のかたがたによるELC宣教師独自の日本語学校が持たれることになつた。生徒としては新着の宣教師四名と婦人宣教師三名が主であつたが、それぞれのご夫人三名と、第一陣として到着しておられた婦人宣教師B・ボイヤム姉とL・ハンソン姉も時おり出席されていた。しかし、ハンセン師は多忙のため不参加で、別に日本語の学習や礼拝での説教の通訳の準備や日本語への翻訳等の仕事を含めて、個人的に私がお手伝いさせていた。この日本語学校は一九五一年(昭和二六年)四月から六月までの三カ月間、月曜日から金曜日の一週間に五日間、午前中一時間ずつ三コマの授業で、途中に約一五分の日本語による礼拝(devotion)と休憩時間(時々バレーボールなどをして緊張をほぐした)などが配置された。三コマの学課は聖書の言葉(Biblical language)と国文法と読み書きであり、先生としては、ルートル神学校校長夫人の岸恵以姉、現在LWFで勤務されている岸井敏師、それに私の三名であつた。当時私は大学生活の最終学年で(旧制大学では、前期・中期・後期の三学年に分かれていて、全くの単位制であつたので、熱心な

—

第一部

—

いいえ、そうじゃありません。

それも、いすですか。

はい、そうです。

これも、いすですか。

はい、そうです。

これは、いすですか。

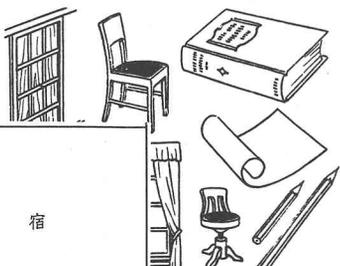
これは、えんぴつです。

これは、かみです。

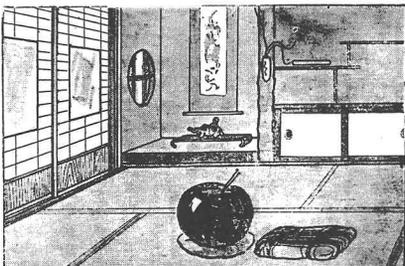
これは、ほんです。

第一部

いち(一)



宿



だい二十か 孫 繪

二三三

屋は日本風の宿屋です。

番どう「いらっしやいませ。」

私「へやがありますか。」

番どう「はい、どうぞお上がりください。」

私「くつをぬいで上がって、そこにそろえてあったスリッパをはくと、女中は「どうぞこちらへ。」と言いながら、かいだんを上がって、二かいのざ

ELC 宣教師日本語学校で使用された日本語読本の一部。長沼校で使用していたものを借用した。(上野田鶴子姉(三鷹ルーテル教会員、国立国語研究所員)のご尽力による。)



前列左より K. ステンバーグ師, D. オフステダグ姉, 岸井敏師, 西恵三,
岸恵以姉, A. M. ミッチェル姉, L. ビーダーセン姉,
後列左より L. ジョンスルード師, G. タング師, P. ハイランド師

学生たちは前期・中期の間に必要な単位を取得し、最終年度の後期には特に興味のある選択課題を残すほかは、全精力を卒業論文の作製に注ぐのが一般であった。それでも個人としてはこの三カ月の午前中は全く別の方向に力を注ぐことになったので、その後卒業までの多忙さが大変だったことをご想像に任せる)。ここに掲載した写真は六月最後の金曜日に卒業試験を終了し、全員めでたく無事？合格を果たし、三名の先生が署名された卒業証書を、岸夫人から一人々々おそかに受け取ったいわゆる卒業礼拝直後のものである(リボンで括った丸い筒状のものに注目のこと)。場所は当時の小石川教会の庭で、現在は礼拝堂の中央部あたりに相当する。先生がたも学生たちからのプレゼントを手にしてたいへん満足そうであるし、このあとすぐに六義園にピクニックとしゃれこんだのであったが、現在のいわゆる謝恩会とでも表現できようか。三カ月の苦労のあとだけに、お互いほっとした表情が、残された別の写真からくみ取ることができる。

卒業式を終了したからといって、すっかり日本語をマスターしたことになるといえないのは、私どもが自分自身の同様の場合のことを考えてみれば極めて明白なことである。その直後七月初めに宣教師会が持たれ、その頃までに

ハンセン師や他の宣教師のかたとほとんど毎週末、東海地方の都市町村を詳細に視察した結果を基に相談し、宣教地およびそれぞれの任地が次のように決定した。すなわち東京（ハンセン師、ポイヤム姉）、静岡（ハイランド師、ハンソン姉）、島田（ステンバーク師、ミツチエル姉）、浜松（ジョンスルード師、オフステダル姉）、名古屋（タング師、ピーダーセン姉）である。

夏休みが終わると秋から毎週末、それぞれの任地に出向いて日曜集会、バイブルクラス、家庭訪問等の活動が始められた。これに加えて教会堂や宣教師館のための土地探しや購入など多忙を極めることになるが、その往復の途中や現地の宿泊地での日本語学習は個人教授の形で行なわれたことはいうまでもない。こうして彼らの日本語は徐々に上達し、以後三〇年以上にわたる日本伝道のために大きく貢献したと確信している。

その後一九五九年秋から私自身がドイツ留学のためヨーロッパに出発することになった。私が専攻したのは天文学であったが、自然科学系の勉強には物理学にしても数学にしても、実験とか方程式とかで通常の言語に代わる意志疎通の手段があるし、また一応大学教育は修了していたし、ドイツ語も旧制高校での勉学を経っていたので、神学とか哲

学などの人文系の人たちに比べて比較的容易な側面があったと考えられた。それでも到着後しばらくは大変に苦勞をして、宣教師のかたがたの日本語習得の苦心をかなり理解することができたと思っている。ドイツ滞在約半年後、ドイツ国内の天文台や関係研究施設の視察旅行を計画し、途中ゲッチンゲン大学で神学を勉強中の山路基先生を訪問した。彼は現在は法政大学でドイツ語を教授しておられるが、当時は西南学院で神学の教授をしつつチャプレンの立場にあつたと聞いていた。手元にある当時の記録をみると、一九六〇年（昭和三五年）五月一二日、木曜日、山路君につられてコンツェルマンの講義に出席とある。山路先生の話では彼は有名なブルトマンの影響を受けた学者で、新約神学の分野では学生にたいへん人気のある人だから、「話はわからんでもいいから顔ぐらい見ても損はないよ」というすすめに従って、全く専門外の講義に出席することになった。まだ若く、足が少々不自由らしい印象を受けたが、その人気の示すとおり教室は超満員、教壇の上の先生の座られる椅子のすぐそばまでギッシリとつまつていて、学問に対するヨーロッパの人々の考え方や知識欲に対する執念の一端をかいま見ることができた。数カ月後ミュンヘンのマックスプランク物理学・天体物理学研究所における

ハイゼンベルグやフライブルグ大学におけるハイデッガー等の特別講義のおりにも同様の経験をjする機会に恵まれたのである。その日のコンツェルマンの講義は幸運にも使徒行伝第二章一一三節のペンテコステを中心に行なわれたので、日本の教会で毎年その時期になると牧師先生がたから聞いていた話であり、おぼろげながら理解することができた。「一同は聖靈に満たされ、御靈が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」時の様子を、続く五節から一一節にわたって描写されている内容に従って一つ一つ詳細に歴史的調査に基づいて説明し、集まって来た人たちが彼らの生まれ故郷の国語で使徒たちが話しているのを聞いてあつげに取られていることも、「これは、いったい、どういうわけなのだろう」という疑問の声に対しても、その広範な分析や調査研究が充分応えることのできる可能性について解説を行なっているという印象を受けたのである。その分析の手法や調査研究の進め方が、自然界に発生する諸現象の不思議さを説明するために科学者たちが対処する手段方法と非常に似た一面のある点に強い興味を感じた記憶が残っている。特に私の心をつかえたのは「あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか」についての説明であった。神の大

きな働きを知ってもらいたいという力強い信仰的な語りかけが、何とかしてその意味を理解したいという熱心な求めと一致した場合に、言葉の壁という極めて常識的な困難が見事に打ち破られたという事実の発生を、歴史は証人を伴って記事として書き残させたのではないかということであった。

ここに登場された初期の宣教師のかたがたの多くは、すでに日本における長い間の宣教の仕事の第一線からは退いて、自国でそれぞれの働きに応じて余世を送る生活に入っておられると聞いているが、日本における宣教の仕事の中のペンテコステという言葉に関して問われたなら、おそらくこのペンテコステの出来事をもって答えとされるのではないかと思う。なぜなら、彼らもまた、神の大きな働きの中心であるキリストを、他国語を話す人々に何とかして伝えたいと努力し活躍された歴史上の証人なのだから。

注 Naganuma School

昨年資料収集のため渡米された徳善先生が持ち帰られた、*Chives of the Evangelical Lutheran Church in America* の中の *Interboard Missionary Field Committee* の報告中、一九五一年二月二十八日付 Darley Downs 氏から Bovenkerk 氏あての手紙と付属資料の中に見られる。

〈書評〉

『博多ルーテル教会八〇年史』

白川 清

——日本福音ルーテル博多教会刊

歴史の記述には、膨大な資料をどのように取捨選択して「事実を伝える」とかという、著者のクールな目が必要である。もちろん、フィクションであってはならず、事実を事実として語らせなくてはならない。

本書は著者に人を得ており、その構成は、

第一部 日本福音ルーテル博多教会八〇年史

第二部 宣教八〇周年記念事業の記録

第三部 座談会

となっている。A4判、二七六頁の大著である。

第一部計二二五頁の著者は、九州大学で宗教社会学を講じている坂井信生教授で、『アーミッシュ研究』（教文館）の大著があり、『宗教学辞典』（東大出版会）の執筆者としても知られている。もちろん博多教会員で、尊父は坂井賢男牧師である。

第一部の著述の特徴は、著者が宗教社会学を専門とするだけに、博多教会だけを点として捕えないで、時代的背景、社会の動き、キリスト教界の流れなど、幾つもの網をかぶせてその時代を浮き上がらせ、その中で博多教会の歩みに筆を進めているというところにある。

そのため、単なる懐古談や年表羅列の記念誌が多いなかにあつて、博多教会という地方の一教会がどのように時代

の宣教を担ってきたかを述べた、立体的で格調のある博多教会史となっている。しかし、決して堅苦しいものではなく、適当にエピソードや貴重な原文資料を配して読みやすくしてある。

市内の主な文化的な建物、放送局、新聞社等の開局年度や各派キリスト教会の創立年度まで明らかにされており、まさに碩学ならではの労作で、著者の大学での講義を偲ばせるものがある。

*

各章の始めには「あらずし」が付され、読者への細やかな配慮がなされている。

第一章「時が満ちるまで」

この章には「開国からルーテル教会宣教師来日まで」の日本キリスト教略史が簡潔な筆致で述べられている。ここには、なぜルーテル教会が佐賀から宣教を始めたか、通説と言われていたこととは異なる事実が紹介されていて興味ぶかい。

「初代牧師山内量平、幹枝」に関しては、和歌山の地を訪れたりして、日本福音ルーテル教会最初の牧師がどのようにして誕生したかがよくわかる。ことに幹枝の活動にスポットを当てた著者の人となりにも奥深さを覚える。

第二章「草創期の博多教会」

本章では、「博多町人の救霊」というビジョンのもとで教会の土地が選ばれ、伝道の方策として「教会青年たちが自前の伝道集会を担当」し、盛んに特別伝道集会を行なったことが記されている。それも時代を反映した伝道計画が立案されたことである。また、バザーが頻繁に行なわれているが、「教会の単なる自己目的のためではなく、他者の救済援助のために敢えて催す当時の博多教会員の意気込み」、改めて感服するのみである」（九二頁）。

第四章「昭和前期の博多教会」

独立自給宣言が、日本福音ルーテル教会の中でどのように取り組まれてきたかが、まざまざと描き出されている。

特に三宅秀雄の記録、「時午後一〇時、一同の顔には永年望みたりし幻の今や我等の手に来たりし感謝と感激の輝きとを見る」には、胸迫るものがある。また、独立を祝しての大熊四郎の一文は名文である。そしてこの精神は、今日も継承して行かなくてはならない大切なことである。

さらに「戦時中苦難の博多教会」では、坪池牧師の、「多難なる時局は……定められた教会の集會に欠かさず出席する事の困難を生ぜしめつつある。……故に若し曾て気が向けば自由に出席できた頃の如き心の状態のままであると、私達は教会出席の機会を殆ど失う。……時を作つて家庭集會をして下さい。牧師は喜んで伺います」という訴えは万感胸に迫るものがある。

また、「ある警戒警報発令中の日曜日、いつまで待っていてもだれ一人来そうにない広い会堂に、じつと坐つて黙禱を続けていた私は、玄関に入つて来た足音に思わず立ち上がりました。『先生、おそくなつてすみません。警報が出て電車が途中で動かなくなり、歩いて来ました』と、あのかん高い調子で言いながら会堂に姿をみせたゲートル姿の三宅秀雄さんのお顔をみたたん、急に胸の中にこみあげてくる熱いものがありました。『妻を合わせて三人で礼拝が守られました』と。教会員が一人も出席出来ずに坪池が夫人と二人だけで守つた礼拝が二回あつたというが、ともかく一回たりとも聖日礼拝を欠かしたことはなく、祈祷会もまた続けられたのである」（二四七頁）。ここに礼拝による教会形成が真摯になされた歩みを見せられる。

こうして宣教の灯は堅く守られてきたのである。それだけにこの事は心に刻んでおきたい。さらに、実に広範囲な伝道が試みられている。交通機関の未発達の時、それは大変なことで、まさにパウロの伝道をほうふつとさせるものがある。

*

本書を読み終わつて感じたことをいくつか記してみると、

一、日本福音ルーテル教会を形成してきた有力な教会の歴史ということをしみじみと感じた。このような教会形成は、あの軍国主義の波が押し寄せた時も、戦時中の苦難の時も、伝道の教会として、とくに特別伝道集会による《言葉による伝道》という教会の本質を貫いてきたところにあるように思われる。

二、また、日本福音ルーテル教会の歩みに関わる指導者としての信徒を輩出してきたことは驚くべきことである。博多教会八〇年の歩みの中に、神がどのように人間をおこし、用いてこられたか。また、彼らがどう主に応え、何を考えてきたか。神の選びの縦糸に、信徒の熱き応答が横糸として教会の歴史を織り出していることを知ることができる。このことに関して、著者の信仰と歴史観を垣間見ることができる。

三、草創期以来、宣教師とのチーム・ミニストリーが実にうまく行っている。その成功例をこの教会の歴史に見ることが出来る。

四、そして庄巻は、箱崎、聖ペテロ、福岡西教会と、三つの教会を生み出した事実である。都会の教会として、大人数の大教会形成を目指した宣教方策を取らず、むしろ、株分けしながら増殖して面の伝道を起こしてきた歩みは、ルーテル教会の宣教方策を生きてきた素晴らしい証しである。

五、本書は、教職、信徒にとって、教会形成の生きた教科書、あるいは手引書と言って良いであろう。精読に値する本であり、伝道方策立案や、各個教会の歩みに、多くの貢献を与えうるものとなっている。

六、記録の正確さは、各個教会の資料保存に一石を投じるものとなっている。箱崎教会には創立礼拝の記録はない。また会員も知らない。本書によってその記録を補い、創立記念礼拝を役員会が新たに設定し、実施できるようにした。週報、月報、役員会記録、教会日誌等を、なおざりにしてはならないことを改めて学んでいる。

七、ただ惜しまれるのは、統計資料がないことである。これが添えられていたなら、どんなにか寄与するものがあったであろう。

トインビーは、「イエス・キリストが活動されるとき、その前に必ず山で祈られた。内に深く自己反省し、その自己反省の結果、大きな信仰が生まれ、あの力強い行動になってあらわれた。それと同じように、いかなる民族の発展にも、その発展の前に必ず内省の時というのがある。じつと内にこもって、その中で自分たちの歴史を反省する。その反省が深くなつてはじめて強い信念が生まれ、次の歴史で外的な発展を遂げることができると述べている。

博多教会のこれからの歩みがそのように発展していくことを心から祈らずにおられない。

本書は著者自身が本づくりをしたと聞いている。著者の心くばり、編集の工夫などがよく生かされている。博多教会をここまで見守り、育ててくださった神のみ業を覚えつつ、一人でも多くの人によつて本書が用いられることを祈つてやまない。

日本のルーテル教会の歴史叙述

徳善 義和

日本福音ルーテル教会は一九九三年に宣教一〇〇年を迎える。一八九三年四月二日（復活日）に佐賀で礼拝をもって以来のことである。これから五年の企画としてこの春第一号を刊行した『日本福音ルーテル教会百年史論集』（年二回刊を予定）をはじめ、『日本福音ルーテル教会百年史』編纂に向けて資料蒐集その他の作業を開始したところである。

海外のルーテル教会（北米とフィンランド）からの伝道によつて「日本福音ルーテル教会」が形成されたが、戦後伝道を開始してこれに加わり、あるいはのちに合同した北米のふたつのグループ、「日本ルーテル教団」を形成した北米からのルーテル教会ミズーリ・シノッド、また、「近畿福音ルーテル教会」と「西日本福音ルーテル教会」を形成したノールウェーの伝道諸団体がある。したがつて、その歴史編纂と叙述については伝道母体となつた海外のルーテル教会や伝道団体のそれと、その働きによつて形成されて今日に至っている日本の四つのルーテル教会のそれと、大別して二つの可能性がある。一〇〇年を迎える「日本福音ルーテル教会」を除けば、他の三教会はそれぞれの背景もちながらうやく四〇年を迎えて、いずれもその最初の歴史編纂のための資料蒐集を開始したところであるとも聞く。したがつてここでは「日本福音ルーテル教会」の歴史編纂と叙述に中心を絞つて、全体教会、教区、各個教会、関連施設の歴史を概観することとする。

一、日本福音ルーテル教会史

日本福音ルーテル教会史叙述は『十年史』から始まる。書物の形で刊行されたものは、私の知るかぎりでは現存しない。幻の十年史である。一九〇三年（明治三六年）三月の「ルーテル新報」に「日本福音路帖教会史」として、二号にわたり連載され、「未完」のままとなっているのが、その書き出しなのだろうか。佐賀で伝道を開始し、熊本、久留米、大牟田から福岡へと伝道を展開しはじめた頃のことである。この頃の歴史叙述に当たるものとしては、最初の二人の宣教師のひとり R. B. Peery, *Lutherans in Japan, 1900* がある。これは『ピーリーの日本伝道開始の記録』（一九八二年、グローリア出版）として青山四郎により訳出されている。次には『日本福音ルウテル教会創設二十年記念史』がある（これは何部か現存する）。一九一四年（大正三年）の発行であって、二〇年の歴史を佐賀を中心に六〇ページ余にまとめたうえで、当時の他の五教会と九州学院の小史を付した一〇〇ページほどの、ハードカバーの出版である。

その後、四十年史、五十年史出版の計画はあつたが、時代の状況下で資料を蒐集したにとどまり、ようやく一九五四年（昭和二九年）に、六十年史が『日本福音ルーテル教会史』のタイトルで、福山猛によつて著述された。すでに蒐集されていた資料、教会總會記録と機関紙「るうてる」バックナンバーを主な資料として年代記風に著述された六〇〇ページに及ぶ大冊である。これが目下手にしうる唯一のものであつて、おおよその歴史的経過や人物などを知るには有力な手がかりとなるが、資料を忠実にまとめ叙述しているものの、しばしば断片的であり、かつまた、教会史を、より大きな時代的背景のなかにおいて視るという視点に欠けている。このように、こうした教会史記述は歴史資料（テキスト）を、より大きな歴史的脈絡（コンテキスト）において視る視点を欠くという問題点があり、ともする

と事実の配列に終わるといふことになる。

同じころ一九五八年に出版された英文の *History of the Lutheran Church in Japan* がある。戦後日本ルーテル神学校から神学大学にかけての時期、教会史を講じたB・P・ハドルのテンブル大学での学位請求論文である。これにはアメリカ側の資料も用いられていて、先の六十年史を少し違った角度から見た趣きを備えている。その叙述は一八九二年から一九五四年に及んでいるが、これまた主として年代記風であつて、たとえば、アメリカのルーテル教会（北米一致ルーテル教会）やその前身の諸シノッドがもつた海外伝道の方策という、期待して当然の「宣教史」的視点もない。ハドルはその後、論文 *Japan's Lutherans Post-war*（論文集『福音・教会・ルター』一九六八年、聖文舎、一―三五ページ）によつて日本基督教団への合同、離脱と、戦後のルーテル諸派との合同協議などの経過を述べている。ほぼ同じ時期をカバーしながら、これを *The Forgotten Years and Beyond, 1942~1972* とつう八〇ページほどの小冊にまとめたのは、戦前と戦後宣教師であつたA・C・クヌーテンである。特に、戦後、連合軍とプロテスタント諸派ミッションのあいだに立つた六人委員会のひとりとして、ルーテル教会から加わつた経験からの叙述や、戦後専門として神学校で教えもし、また実践もした視聴覚教育の導入の部分など、いわばインナーレポートに当たる部分に興味を呼び起こされるであろう。

アメリカからのルーテル教会の伝道と並んで早くから日本伝道に従事したルーテル教会の日本伝道には、フィンランド・ルーテル福音協会のそれがある。この協会は国教会であるフィンランド・ルーテル教会内部にある信仰運動団体だが、最初の宣教師（一族と一女性）を一九〇〇年に日本に派遣した。この団体は初期に九州でアメリカのルーテル教会宣教師に協力したのち、東京、長野、北海道に転じ、独自の「福音ルーテル教会」を組織したが、のち日本基督教団への合同まあと、同教団離脱後の二回にわたつて「日本福音ルーテル教会」と合同し、今日に至っている。その伝道五〇年の歩みをまとめたのが、井上三郎『福音ルーテル教会史』（一九五九年）である。早くから会員となり、

生涯にわたってこの教会の信徒として、またのちには教会の信徒常議員として奉仕した井上は、自分が伝聞し、あるいは経験したところに基づいて一一〇ページ余に歴史をまとめたのである。しかし、およそこの派の働きの資料が日本側にほとんど保存されていない実情からくる、叙述の一面性は避けることができまいと、いくつかの事実を他の側面から見、知っている人々の評が存在するのも事実である。事態はフィンランドに保存されているフィンランド語の諸資料による克明な説明を必要とするであろう。一部これを補うことになると思われるもの——筆者も最近その存在を知り、マイクロフィルムからのコピーの製本されたものを入手したばかりで十分目を通す時間をまだ得ていないからである——は、I. R. Aho, *A Record of the Activities of the Lutheran Evangelical Association of Finland in Japan, 1900~1946* である。アメリカのフィンランド系ルーテル教会から派遣されて、戦後宣教師として来日、前述の団体と協力して働いたことのある著者が、一九六九年にカリフォルニア大学バークレー校に学位請求論文として提出したもののだが、フィンランド語やスウェーデン語の資料、文献の参照が英語によって、間接的にだが可能になったという点で、前掲の『福音ルーテル教会史』を当面補うものたりうるであろう。ただ全体の叙述は資料から事実を並列した以上に出ないように見えるので、ここからも宣教学的視点からの教会史叙述とか、フィンランド・ルーテル福音協会の伝道理念や方策の歴史的叙述とかを期待することはできない。

これから企画、執筆される『日本福音ルーテル教会百年史』（仮題）は「明治二六年」という明治体制確立以来一〇〇年の日本近現代史を踏まえ、その時期の日本と世界、またその中のキリスト教会、ルーテル教会、さらにその宣教を見詰めるながら叙述されることを期待されているわけだが、その手始めに資料蒐集と、その資料に基づく各論、評論などを試みるために刊行を開始したのが、『日本福音ルーテル教会百年史論集』である。ここに収められる論文——少なくともその主なものは、のちに『百年史論文集』として合本もされる企画となっていて、別に企画される『百年史資料集』の巻とともに、『百年史』そのものを補強する役割を担うことになろう。

教区史について

日本福音ルーテル教会には現在五つの教区がある。北から北海道、東、東海、西、九州の五つである。このうち北海道はその歴史のかんりの部分を前述のフィンランド系の伝道に負うので、先の二著のかんりの部分が北海道に割かれているのは当然である。

東海地区は一部戦前からの教会を除いて、一九四九年に最初の宣教師を送って、ルーテル教会の日本伝道に加わった「アメリカン・ルーテル教会」(当初ELC、のちALC)の伝道の働きによって戦後成立した諸教会から成る教区である。したがって、この教区は『東海教区二十年史』(一九七一年)というB5判一四ページの教区史を出版している。この教区は、伝道開始以来、アメリカの福音ルーテル教会日本伝道部であり、ようやく一九六〇年に東海福音ルーテル教会を組織し、一九六三年に日本福音ルーテル教会と合同して、東海教区となるのだが、初期には宣教師会のリーダーシップのもと、その記録も比較的よく整備されている。そのうえ、初めから邦人牧師としてこの協議にも参加し、その経過を熟知する河島亀三郎によってこの教区史が執筆されたこともあって、事実を資料的にも踏まえた、忠実な年代記となっている。河島は「福音と文化」の問題に自ら関心をもっていて、その成果をパンフレットにして自費出版しているものの、この教区史では、こうした自らの関心の視点、その他特定の視点から歴史を視ることはない。

一方、一八九三年に佐賀で始められて以来、一〇〇年に及ぶ歴史を歩むことになった九州教区も、『九州における伝道の歩み』(一九八六年、B6、三〇七ページ)として九〇年の歴史をまとめている。ただ、巻頭に、長い間指導者の責を負った、今は引退の山内六郎による、七〇ページ余の総括的な歴史叙述があるものの、全体としては教区内の各団体、各教会、各関連施設の歴史的な紹介や、教区での何人かの信仰の先達を偲ぶ文や証しなど、いわゆる「社内報」

的性格のものであつて、これに教会史的記述としての教区史を期待することには無理があるであろう。

各個教会史について

日本福音ルーテル教会として、最初の佐賀教会は一九九三年に一〇〇年を迎えるのだが、日本伝道の初期に開拓伝道が行なわれた教会はすでに八〇年、九〇年の歴史を経たことになる。戦前から伝道が進められた諸教会でも六〇年、七〇年になるし、戦後一斉に開拓された教会も次々四〇年の記念を迎える。それらの節目ごとに各教会ではなんらかの形で記念史、記念誌、記念文集を出しており、そのかなりのものが私の手もとにも寄せられている。その多くは、一部にその教会の略史をまとめて配してはいるものの、一応その教会の歩みのおおよそを知ることができる程度であつて、「歴史」の叙述と言えるものは多くはない。たいていは主だった教会員の回想、随想文や座談会と幾葉かの写真、さらによくは巻末に年表を配するものである。手もとにあるものを発行年代順に一覧しておこう。

あゆみ 二十周年記念誌 静岡教会 一九七二年

三十年史 蒲田教会・幼稚園 一九八一年

創立六〇周年記念誌 京都教会 一九八二年

三十周年記念誌 大町教会 一九八二年

あゆみ 三十周年記念誌 静岡教会 一九八二年

しばた 二五周年記念文集 柴田教会 一九八三年

三十周年記念誌 恵教会 一九八三年

教会七十年の歩み 東京教会 一九八三年

七十周年記念誌 下関教会 一九八六年

四十年史 室園教会 一九八七年

多くはB5判タイプ印刷のパンフレット型のものだが、そのタイトルの示すように「記念誌」であつて、教会史とは言えない。そのなかで蒲田教会と室園教会のものが、まとまったページを割いて、歴史叙述に当てている。これは、普通の教会では歴史叙述のために適当な執筆者が得がたいことにもよるが、それ以前に、戦災など特殊のケースはあるものの、各個教会における歴史編纂にも欠くことのできない資料の不足が指摘されなくてはならないだろう。

蒲田教会と室園教会においては少なくともこの二つの条件を満たして、一部統計資料も加えた一応の歴史叙述が果たされている。

このカテゴリーでユニークなのは、『教会七十年の歩み』（東京教会）である。A5判、三八八ページの大冊である。ルーテル教会としては東京で最も古い教会だが、戦災で戦前の資料のすべてを失つたうえに、戦後の資料も十分ではない。しかし参考文献などに依りながら、それぞれの時期に、教会の働きやグループに参加した会員の思い出を月報「ぎずな」に掲載したものを編集、構成して、一応一五〇ページに及ぶ通史の形にまとめている。個人の回想であるから、『日本福音ルーテル教会史』（前述の六十年史）に依り、あるいはこれをなぞり、さらに機関紙「るうてる」のバックナンバーと照合したりする努力を重ねたうえに、個人の回想として興味深い史実の掘り出しにも成功しているのだが、なにぶんにもやはり「思い出」に過ぎず、歴史叙述には至りえない。確実な資料の裏付けがあれば、いわゆる聞き書きに類した資料集の一部を成すことになるであろうか。

しかし、大小まちまちではあるが、歴史叙述の努力、また試みをした例もある。年代順にあげると、

教会七五年のあゆみ 熊本教会 一九七三年 A5 一〇七ページ

教会の年輪 教会自給十周年記念誌 鹿児島教会 一九七四年 A5 九二ページ

私たちの教会五〇年 武蔵野教会 一九七八年 B6 一六九ページ

雲の柱火の柱 宣教八十年史 久留米教会 一九八一年 A 5 四三一ページ

八〇年史 博多教会 一九八九年 A 5 二七六ページ

である。いずれも資料蒐集の努力に加えて、適切な執筆者を得るという二つの条件を満たしての成果である。

熊本教会の場合には、市内中心部で戦災に遭ったものの、機関紙「るうてる」バックナンバーからの関係記事の思念なコピーを資料のひとつの柱として、六〇ページほどの歴史叙述で教会の歩みを書き出している。ただこの場合も、初期が一応叙述の形を取って、年代記風ながら歴史叙述となっているのに、比較的事実に関する把握が正確でありうる最近の部分については、個条書きや人名リスト、統計の配列に終わって、歴史叙述に至っていない。これは、主な読者と想定される当の教会員たちにとって最近の事実は自明のことという意識が働いて、その要約だけを記録にとどめようという意識が働くからであろうか。

鹿児島教会の場合は、戦前一九三一年以来の教会だが、一九六四年の自給宣言以来の一〇年に、その歩みと努力のただ中で教会員として連なつた一會員の手により、六七ページが歴史叙述に当てられているものである。自給後の教会形成、伝道の努力、身障者センターの設置という活動の熱意と熱気が、時には日記風の叙述も織り交ぜて伝わってくるような思いにさせる、いわば運動の参加者の証言の形で綴られているのが特徴である。

武蔵野教会は、鷲宮にあったルーテル神学校の礼拝堂で戦前から始められていた地域伝道の成果であつて、今では會員数からも財政規模からも日本のルーテル教会の一、二に位置する教会である。戦前戦後にかけて牧師であつた青山四郎牧師が教会史を専門とするうえ、長年文書伝道に携わつたという好条件に恵まれて、体裁のうえからも内容から言つても、平均水準以上の教会史となつている。青山牧師を始め、そのあとを継ぐ二人の牧師が、それぞれの在任（現任）期間の執筆に当たたる形をとつた、牧師の眼から見た教会・伝道史と呼べるユニークなものができ上がっている。

特筆すべきは終わりの二書である。久留米教会宣教八〇年史『雲の柱火の柱』は文字どおり、一人の執筆者による通史である。著者国武詰生は教会員であるが、長らく高校教員を勤めたあと、郷土史とくに地方キリシタン史の研究にも当たられる篤学の士である。この八〇年史のために一五年にわたる資料蒐集と二年の執筆によって、日本のルーテル教会八〇年の脈絡の中に、久留米教会の歴史を位置づけた叙述に徹している。全体にわたって、人名、地名、事実の掘り起こしに精力を傾け、久留米教会にかかわった人は牧師、宣教師や役員ばかりでなく、会員から時には求道者に至るまでその名を挙げられている。主な礼拝、諸式のプログラムまで復元され、数多くの写真も、写っている人名がほとんどすべて特定されて添えられている。ただ、こういう努力をすれば、事実と資料に忠実にはなるが、平板な年代記記述となり、人名や事実を列記することになるのもまた避けがたいところである。

この二月に出版されたばかりの博多教会八〇年史は、その主要な第一部、八〇年史、二一五ページの執筆を坂井信生に負っている。祖父を初期の佐賀ルーテル教会員のひとり、父を初期のルーテル教会の牧師にもち、自らもルーテル教会員でありつつ、九州大学で宗教社会学を講じ、とくにアーミッシュの研究で著書もある著者が、資料蒐集と執筆に二年余を傾けての成果である。前半四〇年に重きを置き(四章一五〇ページ)、後半の戦後四〇年は概述(一章六〇ページ)にとどめたというものの、章ごとにまず一ページ弱の「あらすじ」をもって導入としている。叙述も、事実の列記よりも、むしろ時代の流れの中での日本のルーテル教会の中に博多教会を据えて、その活動を概観することに力点を置き、通史としてのまとまりを見せている。各個教会史叙述の一応の水準に達した努力と評価してよいであらう。

ルーテル教会関係施設史

ルーテル教会は一八九三年に佐賀で宣教を開始したのち、二〇世紀に入っていくつもの関連施設を設置して、その

伝道の働きを総合的に展開してきた。これは大きく分けて教育、社会福祉、メディアの三つの部門に分けられる。

教育では、多く各地の教会に併設された幼稚園がある。最も古いものは、佐賀教会幼稚園で、その開園は一九〇二年（明治三五年）である。神学教育の開始は、一八九八年（明治三十一年）熊本に伝道戦線を拡大してのち、一九〇九年（明治四二年）のことであるし、男子中等学校として九州学院の創設は一九一一年（明治四四年）であり、女子教育は一九二六年（大正一五年）、五年制高等女学校、九州女学院の開校をもつて始まる。日本のルーテル教会全体としての、教育の働きの歴史記述や、幼児教育の歴史記述はない。各個幼稚園の歴史は、多く各個教会の歴史記述の一部として存在するに過ぎない。しかし、神学校、九州学院、九州女学院については、それぞれに学校史が存在する。

第一は『日本ルーテル神学校 五十年のあゆみ』（一九五九年、A5、邦文八六ページ、英文六八ページ）である。一九〇九年、熊本の宣教師館の一室での私塾の形で始まりから、九州学院神学部（のち一九二一年、専門学校として認可）、東京移転により日本ルーテル神学専門学校、第二次大戦中の合同、戦後の日本ルーテル神学校に至る五〇年の記述である。初期からかなり丹念に集められた写真を多く収めて、五〇年の略史として一応の成功を見ている。執筆者は、のちに学校法人日本ルーテル神学大学の理事長も務めた内海季秋である。この『五〇年のあゆみ』のちに、一九六四年に日本ルーテル神学大学としての認可を受け、一九六九年には三鷹の現在校地への移転、一九七六年からの「キリスト教社会福祉コース」の設置から一九八六年の文学部への改組（神学科と社会福祉学科の二学科となる）に至る展開があるが、この最近三〇年間についての歴史記述はまだない。

第二は『九州女学院の五十年』（一九七六年、B5、本文二四七十九八ページ）である。五〇年を七章に分け、各章ごとに概要を記したうえ、「五ドルの献金」に始まり、資料、写真、エピソードを含めた包括的な記述である。ただそれだけに、多くの見出しごとに記述は断片的であるとの印象は拭えず、全体の記述は必ずしも論旨として首尾一貫しているとは言えない。事実を伝えるものは資料にせよ、記憶にせよ断片たらざるをえないから、事実の集積を歴史に

まで深めることの困難さを改めて感じさせられるところである。

第三は『九州学院七十年史』（一九八一年、A5、四八四ページ）である。特徴とすべきは、「草創」から「拡張」まで、七〇年を五代の院長の評伝をもって記述したことである。これは四〇〇ページに及ぶ。これは主として執筆に当たった（と思われる）中田幸作が「後書き」でも触れているところであって、読まれない資料集の記述よりも、読まれる評伝を願ったからだが、地元文学界に地歩を占める中田の筆による文学的記述が、しばしば歴史記述を越えてしまう印象を否めない。この『七十年史』には『資料集』と『ブラウン・スタイワルト書簡集』の発刊予定が記されていて、まだ実現に至っていないが、もしこれらが実現を見れば、違った評価を受けることになるのかも知れない。

社会福祉の分野でも、最初の施設慈愛園の開園は一九二三年（大正十二年）四月だが、同じ年の関東大震災は、さらに相次いで、緊急事態の中での応急の対応から東京老人ホームとベタニヤホームの開設に至っている。これらは一九八三年にいずれも創立六〇年を迎えたわけで、東京老人ホームは『開かれた施設をめざして』（A5、二八二ページ）を発行して、その第一部七五ページを現施設長日高登が初代の前施設長松永ちまとの対談で一章、当時の理事長田坂泰迪との対談で一章という形で、歴史談話の形を取り、当時の入所者の「ホームと私」と、「開かれた施設へ、転身」という当時の課題の取り組みに、第二部、第三部を当てているが、厳密な意味で歴史叙述には至っていない。

これに対してベタニヤホーム（本所）は『ベタニヤホームのはたらき』として六〇年略史をまとめている（B5、四二〇ページ）。そのうち二六〇ページほどを占める第一部「六十年略史」は報告書や会議議事録などを年代順に配した、いわば資料集であって、統一された歴史記述には、これまた、なりえていない。第二部の関係者証言や第三部関連資料とともに、六〇年資料集の域を出ない。

慈愛園についても六〇周年に同種の企画はあったと思うが、筆者の手もとにはない。

こうして見てくると、一〇〇年になろうとする日本福音ルーテル教会が、刊行を開始した『百年史論集』（年二回刊、一〇号を予定）と、目下資料収集に努めている『資料集』、それらを踏まえての『百年史』そのものの歴史記述の課題と責任とがようやく見えてくるといふ思いがする。これから数年、当面の課題である。

〈注〉 本稿は、日本基督教学会誌「日本の神学」第二八号（一九八九年）の特集「日本教会史の編纂と叙述」IIのひとつ

として求められて執筆したものに加除、補筆したものである。

『百年史論集』第一号を出してから、半年が経つ。日本福音ルーテル教会内はもとより、教会外からも関心をもって迎えられている声を聞くことはうれしいことである。一九九三年までの五年間、年二回刊として、一〇冊をもって各論的研究を進め、内外の関心を引き起こすことができるならば、幸いである。こうした個別の研究、論者が、一冊にまとめられる『百年史』の部分的な詳細図や、場合によってはトルソを浮き彫りにしていくならば、全体像についてある透視図を描き出すことも可能となるであろう。

第二号には、ヴィクナー氏の論文「アメリカ・ルーテル教会（LCA）の世界伝道一八四二—一九八二年」（その一）を第一に配した。また、『博多ルーテル教会八〇年史』の主要部分を執筆された坂井信生氏（九州大学教授、博多ルーテル教会員）が、その際の資料を用いて、日本福音ルーテル教会の最初の邦人牧師山内量平牧師について評伝をまとめてくださった。二回に分けて執筆の予定である。同じく二回にわたる予定で、日本福音ルーテル教会の教会建築についての座談会を計画し、第一回は総論的な展望を試みた。第三号に掲載予定の第二回座談会では、日本のルーテル教会として、教会建築の際に必要なガイドラインの策定のために、なんらかの方向づけができればと願っている。西恵三氏には、三回の予定で「エッセイ」の形で、戦後東海地方に伝道を開始し、展開した Evangelical Lutheran Church にかかわるストーリーを執筆いただいております。次号までつづく。その後を受けて、こうしたエッセイを執筆しようという申し出を待っているところである。自薦他薦で示唆をぜひお願いしたいものである。あとの二編は、日本福音ルーテル教会の歴史叙述にかかわるものであって、白川清牧師（箱崎教会）には『博多ルーテル教会八〇年史』の紹介を願い、徳善は論文末に記したような次第で執筆したものにより、日本のルーテル教会の歴史叙述の展望を試みた。

第三号には、ヴィクナー氏の論文(その二)、坂井氏の「山内量平評伝」(その二)、座談会「教会建築の歴史と現代」(その二)など承前のもものほか、徳善「初期のミッションボードと最初の宣教師たち」、さらに西氏のエッセイが予定されており、門脇聖子牧師(九州女学院短大助教授)からは日本福音ルーテル教会のディアコニア運動についての教会の諸決定と解説をまとめたものの寄稿の申し出を受けている。

日本ルーテル神学大学諸派資料室にある機関紙「るうてる」のバックナンバーについては、日本ルーテル神学大学と日本福音ルーテル教会で協力して、マイクロファイシユ化を試み、両者に一セットずつ保管して、研究の便に供することとした。マイクロファイシユリーダーによつて必要部分のコピー作成も可能となる。徳善が一九八八年秋にシカゴで収集してきた資料、コピー四〇〇〇枚もほぼ分類整理が終わつて、利用可能である。第一号の「あとがき」を繰り返すようになるが、古い写真や資料など、オリジナルでもコピーでも、提供していただけるとありがたい。日本福音ルーテル教会の共有の資料として保存、保管と、その利用に努めたいと願つている。

この論集の編集、印刷については聖文舎プロダクションの大高弘達氏の献身的な協力と貢献をいただいている。記して、心からの感謝を申し上げたい。

百年史委員会 委員長 徳善 義和

日本福音ルーテル教会百年史論集 第2号

1989年10月31日発行

定価 1000円
(本体 970円)

発行者 前田貞一

発行所 日本福音ルーテル教会 162 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1

編集者 日本福音ルーテル教会百年史委員会

製作者 聖文舎プロダクション

印刷・製本／精文堂印刷株式会社

『百年史論集・第1号』A5判 104ページ 定価1000円(税込)

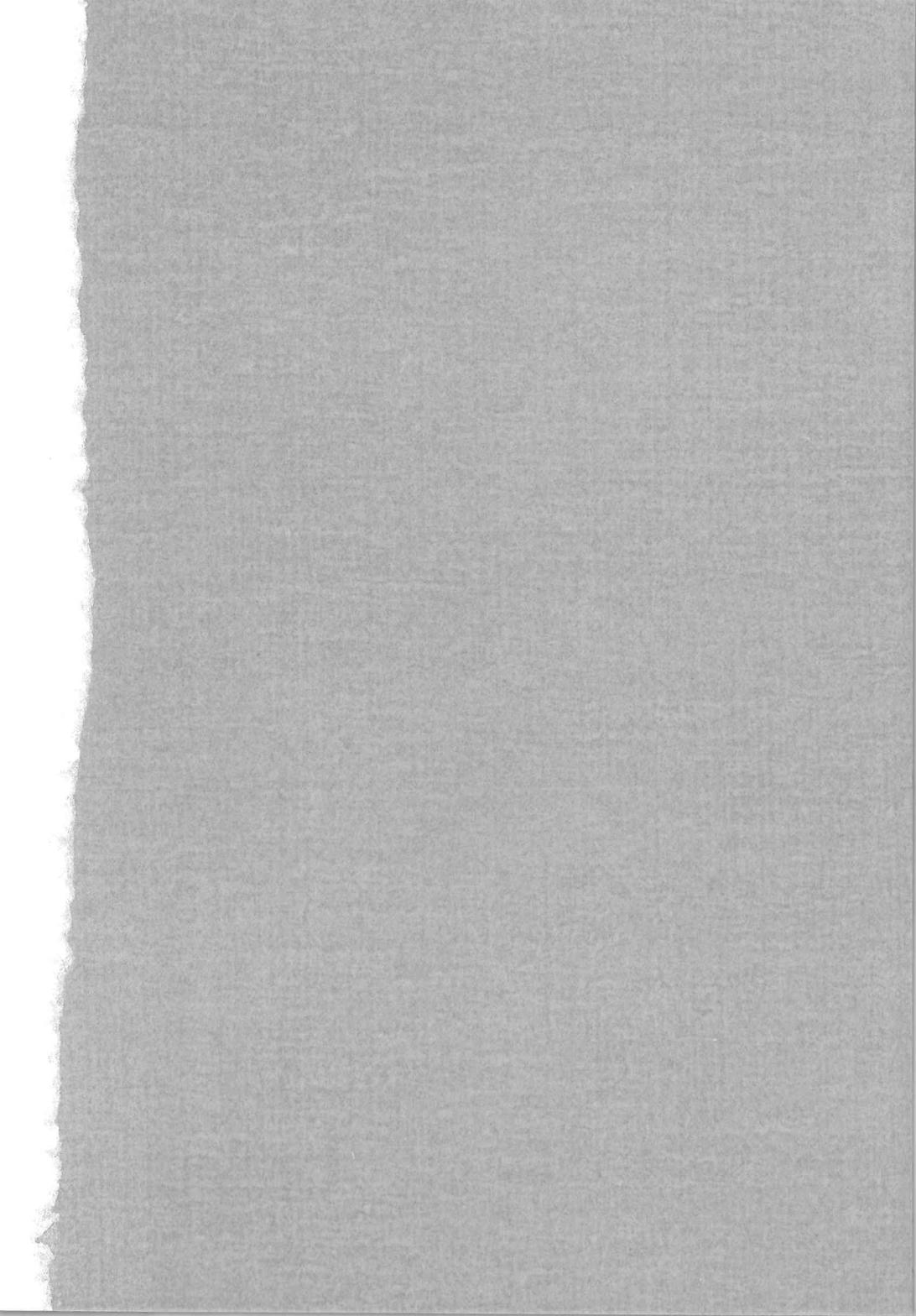
内容「日本における都市伝道について」隅谷三喜男

「アメリカのルーテル教会 日本伝道開始のころ」徳善義和

「礼拝式文史」前田貞一

「エッセイ・隣人にキリストを」西 恵三

「日本福音ルーテル教会と社会問題との関わり」古財克成





定価 1000円 (本体970円)